

## 高原祖泉と嘯巖文蔚

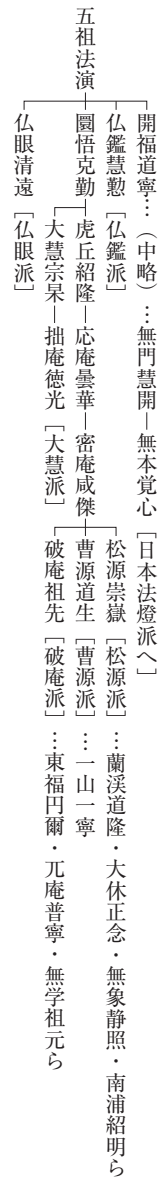
— 『如浄和尚語録』の跋文・校訂と越州天衣寺—

佐藤 秀 孝

はじめに

北宋中期に活動した臨濟禪者である楊岐方会（九九二—一〇四九）の系統を世に臨濟宗楊岐派と称しており、同門の黃龍慧南（普覺禪師、一〇〇二—一〇六九）を派祖とする臨濟宗黃龍派とともに禪宗五家七宗の一角を占めている。北宋後期に隆盛した黃龍派が南宋初期に至って衰退に向かうと、これに代わって楊岐派の系統がしだいに勢力を増している。楊岐派の流れは楊岐方会から白雲守端（一〇二五—一〇七二）を経て五祖法演（東山、？—一〇〇四）へと繼承され、法演に至って漸く大きく隆盛へと向かい、その後の中国禪宗の主流として後代へと繼承されている。五祖法演の門下からは太平慧勳（仏鑑禪師、一〇五九—一一一七）と圓悟克勤（仏果禪師・圓悟禪師、一〇六三—一一三五）と龍門清遠（仏眼禪師、一〇六七—一二一〇）という、仏鑑・仏果・仏眼のいわゆる「五祖門下の三仏」が輩出しており、ほかに開福道寧（寧道者、一〇五三—一一一三）らが化導を敷き、楊岐派は枝分かれして展開し、多くの優れた人材を世に打出していくのである。

そんな楊岐派の中でも後代に大門派として受け継がれたのは、圓悟克勤の信認を得た第一人者である大慧宗杲（妙喜、大慧普覺禪師、一〇八九—一二六三）に始まる大慧派と、同じく克勤の法を嗣いだ虎丘紹隆（瞞睡虎、一〇七七—一二三六）に始まる虎丘派の二つの流れにほかならない。さらに虎丘派は応庵曇華（一一〇三—一一六三）から密菴咸傑（一一一八—一一八六）へと繼承され、咸傑の下から松源崇嶽（老聶翁、一一三二—一二〇二）を派祖とする松源派と、破庵祖先（一一三六—一二二二）を派祖とする破庵派という二大系統が対峙し、鎌倉・南北朝期の日本禪林にも松源・破庵両派の禪が大きく導入されている。これら南宋代における楊岐派の主な流れを系譜で示すならば、つぎのようになる。



いまここに取り上げるのは同じく楊岐派の圓悟克勤の門流に連なっているが、大慧派や虎丘派といった本流とは別の系統に当たる高原祖泉(高源とも、?—一二二九)という禅者の事蹟であり、この人は辛うじて禅宗燈史上にその名を留めているにすぎない存在といつてよい。しかしながら、祖泉は同じく楊岐派の嘯巖文蔚(生没年未詳)とともに、曹洞宗真歇派の長翁如浄(浄長、一一六一—一二二七)の語録である『如浄和尚語録』の編集刊行に大きく寄与した禅者として知られる。如浄の晩年および示寂した直後の事蹟を究明する上で、祖泉や文蔚の存在は欠くべからざるものがあり、その面では注目すべきであろう。

如浄は曹洞宗真歇派に属する禅僧であり、宏智派を含めて南宋代の曹洞宗の主要系譜を示すならば、つぎのようになる。

芙蓉道楷——丹霞子淳——真歇清了——大休宗珙——足庵智鑑——長翁如浄「真歇派」……永平道元

「宏智正覚——自得慧暉——明極慧祚——東谷妙光「宏智派」……東明慧日・東陵永興

明州(浙江省)鄞県の天童山景德禪寺に住持した如浄といえは、いうまでもなく入宋求法した日本の永平道元(仏法房、一一〇〇—一二五三)の本師に当たっている。帰国して一〇余年を経て道元が山城(京都府)洛南深草の観音導利院興聖宝林禪寺(興聖寺)に在った頃、仁治三年(南宋の淳祐二年、一二四二)八月に南宋江南禅林から如浄一代の語録である宋版『如浄和尚語録』が海を越えて道元のもとに齎されている。すでに如浄が宝慶三年(一二二七)七月一七日に世寿六六歳で示寂してより一五年もの歳月が経過していた。そんな折に本師如浄のことが鏤められた宋版『如浄和尚語録』の刊本が届けられたことは、道元にとって亡き本師如浄と再会したかのごとき深い感慨をもって受け取られている。門鶴本『道元和尚広録』巻一「開闢本京宇治郡興聖禪寺語録」には、

天童和尚語録到上堂。(繁詞不録)師乃起立、捧「語薫」香云、大衆、箇是天童打「跣跳」、踏「翻東海」龍魚驚、龍魚驚怕不「潜」形。且道如何。此語也先到、先到也此語。若道未「道」、要且清浄大海衆証明。良久云、海神知「貴也知」価。留「在人天」光照「夜」。下座与「大衆」三拜。(大久保・道元全集下・二六頁)

という上堂が収められており、流布本『永平広録』巻一「開闢初住本京宇治泉興聖寺語録」では、

天童和尚語録到上堂。(繁詞不<sub>レ</sub>録) 師乃起立、捧<sub>レ</sub>語薰<sub>レ</sub>香云、箇是天童打<sub>レ</sub>跏跳<sub>レ</sub>、踏<sub>レ</sub>翻東海<sub>レ</sub>龍魚驚。清淨大海衆、如何証明。良久云、海神知<sub>レ</sub>貴也知<sub>レ</sub>価、留<sub>二</sub>在人天<sub>一</sub>光照<sub>レ</sub>夜。下座与<sub>二</sub>大衆<sub>一</sub>三拜。(曹全宗源下・五八 a)

とあり、字句にかなりの異同が認められる。『如浄和尚語録』が齎されたとき道元は丁重にこれを捧げ持つて薫香し、上堂を終えた後には大衆(修行僧ら)とともに三拝している。『如浄和尚語録』が到来して以降、道元は『正法眼蔵』の諸卷や『道元和尚広録』(『永平広録』とも)の上堂などに如浄のことを頻繁に引用するようになり、道元の深い思索によって拈提がなされている。しかも如浄の語録を受け取つてまもなく、道元は住み慣れた洛南深草の地を離れて越前(福井県)吉田郡志比莊の深山幽谷へと分け入り、越前の地頭、波多野義重(如是居士、?—一二五八)の帰依を得て吉祥山永平寺(初名は大仏寺)の開山を迎えられている。宋版『如浄和尚語録』の存在は、道元の後半生と永平寺を考える上でもきわめて重要な視点の一つとなっている。

宋版『如浄和尚語録』は如浄門下の人々によってまとめられ刊行されたものであり、道元にとつて編者の幾人かは在宋中に道交を結んだ親しい知己であったに相違ない。たとえば大慧派の雪窓祖日などは無際了派の法嗣であったが、了派の示寂後は如浄にも随侍し、天童山景德寺で如浄がなした上堂を編者としてまとめられている。祖日は在宋中の道元とも深い道交をなしていたことが知られている。そんな『如浄和尚語録』の編集刊行に大きく寄与し、跋文を寄せた南宋の臨濟禪者こそ、本論文に取り上げる高原祖泉と嘯巖文蔚なのであり、この両者の名ないし存在は早くから『如浄和尚語録』を通して初期永平寺僧団内にも知られていたことである。道元が在宋中にこの両禪者を直に知っていたか否かは定かでないが、少なくとも帰国当時に五山第二位の杭州靈隱寺に住持していた祖泉の存在は、道元も遠く風聞していたことであろう。しかしながら、この両者に関してはこれまでほとんど事跡が明確にされておらず、彼らが如何なる因縁で『如浄和尚語録』の編集刊行に関わり、跋文を寄せることになったのかも定かでなかった。本稿では限られた史料を通してではあるが、そんな高原祖泉という禪者に注目し、可能な限りその足跡を整理してみることになりたい。また祖泉以上に不明な点が多いものの、嘯巖文蔚という禪者についても併せて若干の考察を試みるものである。

## 高原祖泉と嘯巖文蔚

高原祖泉といえは南宋中期に楊岐派の退庵道奇(奇道者)の法を嗣いだ高弟であり、密印安民から別峰宝印(慈辯禪師、一一〇九—

一一九〇)とつづく流れに属している。しかも祖泉は晩年に杭州(浙江省)錢塘県の北山景德靈隱禪寺(五山第二位)の住持として『如浄和尚語録』に跋文を寄せているのみならず、如浄門下の人々の依頼を受けて『如浄和尚語録』全体をも校勘しているのであり、その面でも如浄とは因縁浅からぬものが存したといえるだろう。しかしながら、祖泉その人の事蹟は明確ではなく、これまで何ら考察の対象にされることもなかった。一方、嘯巖文蔚という禪者は楊岐派の息庵達観(一一三八—一二二二)の法を嗣いでおり、南宋初期の蓬庵端裕(仏智禪師、大悟禪師、一〇八五—一一五〇)から水庵師一(一一〇七—一一七六)とつづく流れに属している。文蔚は越州(浙江省)紹興府山陰県の法華山天衣禪寺に住持し、靈隱寺の祖泉と同じく『如浄和尚語録』に跋文を寄せたことが知られている。文蔚の事蹟は祖泉以上に不明な点が多く、なぜ五十十利でもない越州天衣寺の住持であった文蔚が『如浄和尚語録』に跋文を寄せることになったのかは、これまで一つの疑点とされてきた。

高原祖泉と嘯巖文蔚とともに『碧巖録』で名高い圓悟克勤より次第する系統であって、祖泉・文蔚の両禪者とともに禪宗系譜で示すならば、つぎのようになる。

圓悟克勤—密印安民—別峰宝印—退庵道奇—高原祖泉

蓬庵端裕—水庵師一—息庵達観—嘯巖文蔚

この両者はともに克勤の系統を師資相承しており、南宋中期の浙江禪林に活躍した臨濟禪者として知られる。注目されるのは文蔚が住持する以前に祖泉も同じ天衣寺の住持を務めた経歴が知られることであって、かつて天衣寺の住持を務めた祖泉と天衣寺の現住であった文蔚という二禪者がそれぞれ『如浄和尚語録』に跋文を寄せているわけである。

越州の天衣寺といえば、北宋中期に雲門宗の天衣義懷(振宗禪師、九九三—一〇六四)が住持し、化導を盛んにしたゆかりの禪刹として知られる。義懷は雲門宗中興の祖と仰がれた雪竇重頭(隱之、明覚禪師、九五〇—一〇五二)の法を嗣いだ高弟であり、義懷が拠点とした天衣寺は、北宋中期における雲門宗の隆盛を象徴する主要禪刹の一つであったといつてよい。天衣義懷のもとからは慧林宗本(法空、大本、円照禪師、一〇二〇—一〇九九)・法雲法秀(秀鉄面、大秀、円通禪師、一〇二七—一〇九〇)・長蘆応夫(広照禪師)・天鉢重元(文慧禪師、?—一〇六三)などすぐれた人材が多く輩出しており、南宋初期までつづく雲門宗の隆盛はひとえに明州雪竇山の重頭と越州天衣寺の義懷が絶大な接化を振るつたことに由来している。

そんな雲門宗発展の拠点寺院の一つであった天衣寺も、やがて南宋代に入ると臨濟宗楊岐派の禪者によって維持継承されるよう

になつており、南宋中期に至つて相繼いで天衣寺に住持したのが高泉祖泉と嘯巖文蔚であつた。しかもこの両禪者はともに『如浄和尚語録』に跋文を寄せており、その背景には越州出身である如浄と越州天衣寺をめぐる興味深い因縁が背景に存したことが浮かび上がってくる。本稿では『如浄和尚語録』に跋文を寄せた上で、さらに『如浄和尚語録』を全体にわたつて校勘したという事実を踏まえ、祖泉という禪者の事蹟を中心に掘り起こし、この人の動向と隠された功績について、文蔚の活動を併せ踏まえながら逐一に論ずるものである。『如浄和尚語録』の編纂刊行に深く関わつた祖泉や文蔚の活動を解明することは、如浄を研究する上で一助となるものであり、以下、順次に考察を進めることにしたい。

### 如浄の出生地と越州天衣寺

そこで如浄が越州すなわち現今の浙江省紹興市の出身であつた因縁について、はじめに触れておくことにしたい。入宋求法して如浄の法を受け継いで帰国した道元は『正法眼蔵』「行持下」の巻で、先師如浄の出身地に関して「先師天童和尚は越上人事なり」（曹全・宗源上・一〇〇a）と書き残している。この点は道元の法孫に当たる瑩山紹瑾（仏慈禪師、一二六四—一三三五）も『伝光録』「第五十祖天童浄和尚」の章で「師者越上人事也、諱如浄」（曹全・宗源下・一一三b）と記しており、流布本『洞谷記』の「洞谷伝燈院五老悟則并行業略記」の「高祖大宋国裏明州天童三十一代和尚」の章でも「諱如浄、越上人也」（曹全・宗源下・五一三a）と同様に記している。また道元の伝記をまとめた瑞長本『建誓記』においても、

和尚答云、我先師天童如浄古仏、大唐越州ノ人事ナル間々、越之名ヲ聞モナツカシシ、我所望也、則チ御下向アルヘシト御返事アリ。（吉田道興・道元伝記史料集成・一〇六頁）

と記されており、道元が日本の越州（越前・福井県）に下向することを快諾した理由の一つとして、如浄が中国（大唐）の越州出身であつた点が挙げられている。これらの記述によつて、如浄が越州すなわち紹興府地内の出身であつたことは疑いないであろう。しかしながら、如浄が越州紹興府のいずれの県で出生したのかについては残念ながら伝えられていない。

越州とは往古よりの地名であり、杭州から東に向かつて明州（寧波）に到る中間に位置する州であり、南宋初期の紹興元年（一一三二）に会稽・山陰二帯を治めることを目的に元号に基づいて紹興府が置かれている。南宋代には紹興府、元代には紹興路という行政区分が用いられており、やがて現今の紹興市へとつづいている。紹興といえれば日本では紹興酒の産地として広く知られており、

また近代中国の文豪として名高い魯迅(本名は周樹人、字は豫才、一八八一—一九三六)の生家がある。かつて越州紹興府は山陰県・嵊県・会稽県・余姚・蕭山県・新昌県・上虞県・諸暨県の各県に分かれており、府城のある中心地が山陰県に当たっている。ちなみに現今、余姚県は寧波市に属する余姚市となっている。

ところで、如浄が越州出身であったという事実を踏まえた上で注目すべき記事として、瑞長本『建撕記』に、

御母、和尚ヲ孕ミ給時、天衣ノ山神、之ニ兒ヲ授クト夢ミ給ウ也。(吉田・道元伝集成・一四三頁)

という興味深い逸話が載せられている。これは如浄の出生にまつわる逸話であり、門子本や元文本など古写本『建撕記』諸本にも同様に記されている。記事内容が史実を伝えた逸話なのか確定はできないが、南宋から伝えられた何らかの情報に基づく伝承であろうと考えられる。その内容は如浄を身籠もったとき如浄の母が「天衣」の山神が児を授けてくれる夢を見たと言われる。この場合、母と関わる「天衣の山神」というのが果たして何を意味しているのかが重要な鍵となろう。

この点、江戸期の面山瑞方(永福老人、一六八三—一七六九)は『大宋国慶元府太白名山天童景德禪寺第三十代堂頭長翁如浄祖師行録并序』(以下は『如浄祖師行録』と略称)で、この逸話を紹介しているものの、

越上人事、未<sub>レ</sub>考<sub>二</sub>族姓<sub>一</sub>。其母夢<sub>二</sub>山神授<sub>レ</sub>兒而孕矣。以<sub>二</sub>趙宋隆興元年癸未七月七日<sub>一</sub>而産。(曹全・史伝下・二一b)

と微妙にその内容を変更している。ここで如浄を「越上の人事」とし、族姓は定かでない<sup>(2)</sup>と記しているのは頷けるが、問題はつづく文が「其の母、山神が児を授くるを夢にみて孕む」となっており、なぜか「天衣」の二文字が削られていることであろう。しかも俗姓は未詳とし、幼少期の事跡もほとんど不明となっているにも拘わらず、なぜか如浄の生年月日についてのみ明確に隆興元年(一一六三)七月七日であったと明記し、唐突な新説が付加されている点などはきわめて不可解といつてよい。

面山瑞方は果たして如何なる史料あるいは伝承に基づいて如浄が隆興元年七月七日に出生したとする説を『如浄祖師行録』に挿入することができたのであろうか、その由縁が定かでないのは惜まれる。ただし、それ以上、ここで取り上げるのは本題から外れるので、いまは深く触れたい。いま、ここで問題とすべきは、古写本『建撕記』で「天衣の山神」とあった記述に対し、『如浄祖師行録』になると単に「山神」と改められている点である。面山瑞方としてはおそらく「天衣」の二文字に意味などなく、重要なものであると解して削ったものようである。しかしながら、実際にはこの古写本『建撕記』が伝える「天衣」の二文字には重要な意味合いが背景に存していたのであって、この二文字を略してしまうと、この逸話の持つ真の意味合いが逆に不明瞭となっ



てしまうのである。

この如浄出生にまつわる逸話は、他の禅僧の塔銘や行状などにも窺えるような出生譚であつて、それほど際立った内容ではないだろう。<sup>(3)</sup>問題なのは古写本『建撕記』が「天衣」の二文字を付けていることこそ重要なのであつて、如浄出生の背景を窺う上できわめて興味深い意味合いが含まれていると解される。なぜならば、ここにいう「天衣の山神」とは、越州山陰県に存した法華山天衣寺の山神（護伽藍神）を指していると思われるからである。

越州の法華山天衣寺に関しては、南宋中期にまとめられた越州の地誌『嘉泰会稽志』巻九「山（山陰県）」に、

法華山、在<sub>二</sub>臬西南二十五里。旧<sub>二</sub>絳云、義熙十三年、僧曇翼誦<sub>二</sub>法華經<sub>一</sub>、感<sub>二</sub>普賢応現<sub>一</sub>。因置<sub>レ</sub>寺、今為<sub>二</sub>天衣禪院<sub>一</sub>。山有<sub>二</sub>十峰<sub>一</sub>、咸平中、裴使君莊、各命以名。一法華、二衣孟、三積翠、四朝陽、五雲門、六倚秦、七天女、八猿嘯、九起雲、十月嶺。山下<sub>二</sub>二溪<sub>一</sub>、東北流、冬夏不竭。唐李邕碑云、其峰五連、其溪双帶。蓋謂<sub>レ</sub>此也。万斉融碑云、双鳥所<sub>二</sub>以示<sub>レ</sub>兆。今尚翔鳴。旧<sub>二</sub>絳云<sub>一</sub>、山有<sub>二</sub>双鳥<sub>一</sub>、雛長則送出<sub>レ</sub>之。《旧<sub>二</sub>絳<sub>一</sub>、法華山在<sub>二</sub>会稽臬南四十里<sub>一</sub>、後正<sub>レ</sub>之。

と記されており、越州山陰県西南二五里に存する法華山と、これを取り巻く景勝・史蹟などがまとめられている。同じく『嘉泰会稽志』巻七「寺院（山陰県）」には、さらに天衣寺伽藍の歴史の変遷について、

天衣寺、在<sub>二</sub>臬南三十里<sub>一</sub>。晋義熙十三年、高僧曇翼結<sub>レ</sub>菴、誦<sub>二</sub>法華經<sub>一</sub>多<sub>二</sub>靈異<sub>一</sub>、内史孟覲、請置<sub>二</sub>法華寺<sub>一</sub>。至<sub>レ</sub>梁、惠拳禪師、亦隱<sub>二</sub>此山<sub>一</sub>、武帝徵<sub>レ</sub>之不至。有<sub>レ</sub>翼公所<sub>二</sub>頂戴<sub>一</sub>紫檀十二面觀音、及梁昭明太子統遺<sub>二</sub>拳公<sub>一</sub>金縷木蘭袈裟、銀澡瓶、紅瑠璃鉢、至<sub>レ</sub>今具在。又有<sub>二</sub>金銅維衛佛像<sub>一</sub>、本西域阿育王所<sub>レ</sub>鑄、浮<sub>レ</sub>海而至。梁武以施<sub>二</sub>山中<sub>一</sub>、儀相甚偉、今奉<sub>二</sub>於西序<sub>一</sub>。宣和初、詔改<sub>レ</sub>僧為<sub>二</sub>德士<sub>一</sub>、寺院為<sub>二</sub>宮觀<sub>一</sub>。銅鏡銅像、期以<sub>二</sub>十日<sub>一</sub>尽。輸官俄復命、惟輸<sub>レ</sub>鏡而銅像悉獲<sub>レ</sub>存。故維衛像、至<sub>レ</sub>今嚴奉焉。寺有<sub>二</sub>十峰<sub>一</sub>、堂以<sub>二</sub>山之十峰<sub>一</sub>為<sub>二</sub>堂名<sub>一</sub>。山下又有<sub>二</sub>双澗<sub>一</sub>、故曾文清公詩云、布鞞青鞋踏欲<sub>レ</sub>無、看<sub>レ</sub>山看<sub>レ</sub>水未<sub>レ</sub>成疎、十峰<sub>二</sub>及澗<sub>一</sub>尤奇処、万壑千巖総<sub>レ</sub>不加。淳熙七年、詔以<sub>二</sub>皇子魏憲王薨<sub>一</sub>、攢<sub>二</sub>於山中<sub>一</sub>、設<sub>二</sub>置衛守<sub>一</sub>。且歲時加<sub>二</sub>恩沢<sub>一</sub>有<sub>レ</sub>差云。

とあり、東晋代の創建時から南宋中期に至る天衣寺の歴史の変遷が簡略にまとめられている。天衣寺は越州山陰県南三〇里に存するとされ、法華山の位置が山陰県西南二五里と伝えているのと微妙に相違している。これはおそらく法華山という山の裾野の一角に天衣寺伽藍が建立されていたためであろう。

東晋の義熙一三年（四一七）に高僧曇翼がこの地に草庵を結んで『法華経』を誦して靈異が多く、このため会稽太守であった内

史の孟覬が堂宇を建立して法華寺と称したとされる。梁代には惠拳という僧がこの山に隠れ、梁の武帝こと蕭衍(字は叔達、四六四—五四九、在位は五〇二—五四九)が召しても赴かなかつたと伝えられる。天衣寺の名の由来は明確でないが、山に十峰がある内の一つが天女峰と称されていることから、何かしら民間信仰的な香りを窺うことができよう。寺には曇翼が賜わつたとされる紫檀の十二面観音菩薩像があつたとされ、惠拳ゆかりの品々も伝えられていたものらしい。さらにインドの阿育王(アショーカ王)が铸造させたと伝承される金銅の維衛仏像も梁の武帝によつて寺に奉納されたと伝えられている。<sup>4)</sup>

天衣の山神とは天衣寺の山神すなわち護伽藍神の類いと見られ、古写本『建撕記』では如浄の母は天衣寺の山神の夢を見て懐妊したという逸話を伝えていたわけである。この伝承からすれば、如浄の生家は天衣寺とかなり近接する地に存したことを暗に示すものであろう。あるいは如浄の母親ないし生家は天衣寺を通して仏教信仰を深めていたとも解されよう。そのため『如浄祖師行録』が「天衣」の二文字を削つたのでは折角の伝承の持つ意味合いが全く活かされなくなつたというのが私の見解である。

### 高原祖泉の伝記記事

ここでまず高原祖泉に関する禅宗燈史や僧伝の記述について、一通り整理しておくことにしたい。祖泉には特定の語録などは残されておらず、個別の伝記史料の類いも伝えられていない。明代初期の『続伝燈録』卷三五「目錄」では「金山道奇禪師法嗣一人」に「靈隱祖泉禪師(無録)」(大正蔵五一・七〇六b)として祖泉の名のみが載せられている。つづく同じ明代初期に編集された『増集続伝燈録』卷二では「金山退庵奇禪師法嗣」として、

杭州靈隱高原祖泉禪師。上堂、拳<sub>下</sub>九祖伏陀密多尊者問二八祖仏駄難提尊者、父母非我親<sub>上</sub>話。頌曰、父母分明非我親、祖師肝胆向人傾、直下若能親薦得、優曇花発火中春。贈<sub>三</sub>黃漢嶺開<sub>二</sub>接待<sub>一</sub>偈曰、路繞懸崖一<sub>二</sub>万仞頭、行人到此一場愁、驀然得箇<sub>三</sub>休歇處、重疊関山信脚遊。(『増集続蔵一四二・三九〇b』)

と高原祖泉の章が見録立伝されている。しかしながら、それもわずか一上堂(実際には本則と頌古の類い)と一偈頌を載せるのみであつて、やはり伝記的な記載などは全く見られない。<sup>5)</sup>また『増集続伝燈録』卷三「靈隱高原泉禪師法嗣」には「婺州宝林無機禪師」の章(『増集続蔵一四二・四〇〇b』)を載せているが、法嗣の無機(法諱は未詳)についてもやはり二上堂を載せるのみで、祖泉との関わりを伝えるような伝記的な記事は何も載せられていない。



一方、禪宗の宗派図としては、破庵派（聖一派祖）の東福円爾（辨円、聖一國師、一二〇二—一二八〇）が日本に將來した南宋後期の「宗派図」には「別峯印禪師」の法嗣として「如菴崇禪師」「自聞聰禪師」「退菴奇禪師」という三人の名を挙げ、また「退菴奇禪師」の法嗣として「洪山辨禪師」「薦福円禪師」「高原泉禪師」という三人の名を挙げており、その後の宗派図には見られない祖泉と同門に当たる洪山□辨と薦福□円の名が記されている点で注目される。日本の南北朝後期に編集刊行された「仏祖正伝宗派図」では「金山退菴道奇」の法嗣として「靈隱高原祖泉」の名のみが挙げられており、室町中期に編集された「仏祖宗派図」では「金山退菴道奇」の法嗣として「高源□泉」の名のみが記されている。

江戸期の禪宗の宗派図としては「正誤仏祖正伝宗派図」三に「金山退菴道奇」の法嗣として「靈隱高原祖泉」の名が挙げられ、さらに祖泉の法嗣として「宝林無幾」の名が記されている。「掌珠宗派図」では「金山退菴道奇」の法嗣として「靈隱高原祖泉」の名が記されている。また「伝燈歷世譜」巻中「楊岐下世譜」には「鎮江金山退菴道奇」の法嗣として「杭州靈隱高原祖泉」とあり、祖泉の法嗣として「婺州宝林□無幾」の名が載せられている。

また伝記的な記載としては南宋末期に大慧派の枯崖円悟が編集した『枯崖和尚漫録』巻上「高原泉禪師」の項に、

高原泉禪師、令聞素著、瑞<sub>二</sub>世慶元梨洲<sub>一</sub>。有問、囊錫已露、至宝難<sub>レ</sub>藏、四衆側聆、願聞<sub>二</sub>法要<sub>一</sub>。曰、截<sub>レ</sub>舌有<sub>レ</sub>分。問、恁麼則一句超<sub>二</sub>今古<sub>一</sub>、禪徒息<sub>二</sub>方機<sub>一</sub>。曰、又恁麼去也。問、如何是梨洲境。曰、猿啼<sub>二</sub>古木<sub>一</sub>、月照<sub>二</sub>高峰<sub>一</sub>。問、如何是境中人。曰、匙挑不<sub>レ</sub>上。問、人境已蒙<sub>二</sub>師指示<sub>一</sub>、向上宗乘事若何。曰、且待<sub>二</sub>驢年<sub>一</sub>。四衆拭目傾<sub>レ</sub>耳。（<sub>二</sub>正統藏<sub>一</sub>一四八・七八a）

とあり、祖泉が明州慶元府（浙江省）鄞県の四明山中に存した梨洲禪寺に住持したこと、門下の学人と交わした五つの問答が記されている。同じく『枯崖和尚漫録』巻上のいま一方の「高原泉禪師」の項にも、

高原泉禪師、住<sub>二</sub>梨洲<sub>一</sub>、荒陋寂寥。無準為<sub>二</sub>首座<sub>一</sub>、荆叟為<sub>二</sub>維那<sub>一</sub>、雙杉在<sub>二</sub>会下<sub>一</sub>。原夜坐<sub>レ</sub>拳、江月照<sub>レ</sub>松風吹、永夜清霄何所為。荆叟曰、覷著水河連底凍。雙杉曰、牽來好与<sub>二</sub>頂門槌<sub>一</sub>。原默然。壯歲時已得<sub>二</sub>奇退庵許与<sub>一</sub>矣。（<sub>二</sub>正統藏<sub>一</sub>一四八・七九a）

として祖泉が梨洲寺でなした活動が記され、梨洲寺で住持の祖泉を首座の無準師範（仏鑑禪師、一一七七一—一二四九）と維那の荆叟如珏（仏心禪師、?—一二六四）が役僧として補佐し、雙杉中元が修行僧として会下にあつて頭角を現していた動向なども伝えられている。その内容の詳細に関しては、後段で一々に詳しく触れることにしたい。

このように祖泉の記事は諸文献に断片的に窺うことができるのであり、このほかにも諸禪者の語録や詩文集などにも記されてい



が開堂出世したのは嚴州（浙江省）の靈岩禪寺であり、さらに数ヶ寺の住持を務めてから、鎮江府（江蘇省）丹徒県の金山龍游禪寺の住持であったときに勅旨を受けて杭州靈隱寺に遷住している。靈隱寺で化導すること四年を経て、晩年に天童山に遷住しており、六年間にわたって住持を務めている。嘉定五年（一二二二）七月二七日に達観は世寿七五歳で示寂しており、全身が天童山の玲瓏巖下に葬られている。

「天童山息菴禪師塔銘」によれば、達観の法を嗣いだ門人として守中と從礼という二禪者の名が記され、また達観が剃髮得度した小師（弟子のこと）として永澄・永隆ら九七人が存し、永隆は達観に先んじて逝去したものらしいが、永澄が健在であったことを伝えている。残念ながら「天童山息菴禪師塔銘」には文蔚の名は載せられておらず、達観は剃度の弟子に「永」の字を系字として授与していたらしいことから、文蔚は達観が剃髮得度した子飼いの弟子ではなかったことになろう。

一方、明代初期の『続伝燈録』卷三五「目録」には「天童達観禪師法嗣四人」として、  
虎丘善濟禪師（二人見録）・華藏善淨禪師・天衣文蔚禪師・柏巖凝禪師（已上三人無録）。

とあり、法嗣四人の名が記されている。無録の三人の中で文蔚の名は二番目に記されている。これにつづく『増集続伝燈録』卷二には「天童息庵觀禪師法嗣」として「蘇州虎丘伽堂善濟禪師」「紹興天衣嘯巖文蔚（蔚）禪師」「華藏純庵善淨禪師」「柏巖凝禪師」という四禪者の章が見録されており、同卷二「目録」では「此後無伝」として「断崖躬禪師」「万寿独山礼禪師」「復川源禪師」「無芳覺禪師」という四禪者の名が挙げられている。伽堂善濟・嘯巖文蔚・純庵善淨・柏巖□凝という見録者四人の中で文蔚は二番目に章が立伝されている。しかしながら、『増集続伝燈録』卷二「紹興天衣嘯巖文蔚禪師」の章も、

紹興天衣嘯巖文蔚禪師。上堂、拳雲門和尚示<sub>レ</sub>衆云、人人尽有<sub>二</sub>光明<sub>一</sub>在、看時不<sub>レ</sub>見暗昏昏、作麼生是諸人自己光明。自代云、厨庫山門。又云、好事不如<sub>レ</sub>無。師頌曰、人人尽有<sub>二</sub>光明<sub>一</sub>在、看時不<sub>レ</sub>見暗昏昏、踢<sub>三</sub>倒山門与<sub>二</sub>厨庫<sub>一</sub>、此時明暗自然分。（正統藏一四二・三九〇a・b）  
ときわめて簡略なものであり、わずかに「雲門厨庫山門」の古則に対する上堂（實際は頌古の類いか）を載せるのみで、伝記的な内容は一切記されていない。

東福円爾將來『宗派図』では「息菴觀禪師」の法嗣として「淳菴淨禪師」「杖錫恭禪師」「開先礼禪師」「芙蓉濟禪師」という四人の名を挙げているが、そこに文蔚の名は記されていない。南北朝後期の『仏祖正伝宗派図』には「天童息菴達観」の法嗣として「虎丘伽堂善濟」「此菴□可」「華藏淳菴善淨」という三禪者を載せるのみで、やはり文蔚の名は存しない。室町中期の『仏祖宗派図』

に至って「息菴□觀」の法嗣に「劬堂□濟」「天衣□蔚」「純菴□浄」の三人を挙げており、ようやく文蔚の名が載せられている。

江戸期の宗派図としては、『掌珠宗派図』では「天童息庵達観」の法嗣として「虎丘伽堂善濟」「天衣嘯岩文蔚」「万寿独山□礼」「華藏純庵善浄」とあり、文蔚は法嗣四人の中で二番目に名が載せられている。『正誤仏祖正伝宗派図』三の楊岐派の箇所では「天童息菴達観」の法嗣として左から「虎丘伽堂善濟」「万寿独山□礼」「此菴□可」「玉融栢岩山(林氏)」「育王断崖□躬」「靈隱栢巖□凝」「復川□源」「天衣嘯巖文蔚」「無方□覺」「華藏純菴善浄」とあり、一〇人の法嗣の中で八番目に文蔚の名が挙げられている。『伝燈歴世譜』巻中「楊岐下世譜」には「慶元天童息庵達観」の法嗣として「無方□覺」「復川□源」「此菴□可」「育王断崖□躬」「万寿独山□礼」「靈隱栢岩□凝」「紹興天衣嘯岩文蔚」「平江虎丘伽堂善濟」「華藏淳菴善浄」とあり、九人の名を伝えている。

「天童山息菴禪師塔銘」が伝える法嗣二人の中で、守中の事跡は禪宗燈史や宗派図にも載せられていないが、従礼については『増集続伝燈録』や宗派図が「独山□礼」と記している禪者がこれに当たると見られ、この人は独山従礼と連称されるものである。従礼に関しては「開先礼禪師」や「万寿独山礼」とあるから、廬山の開先禪寺や蘇州の万寿報恩光孝禪寺に住持したものと見られる。いずれにせよ、嘯巖文蔚に関しては、その事跡がほとんど辿れないのであつて、わずかに越州(紹興府)の天衣寺に住持した消息しか伝えられていない。そのため以下、本稿では高原祖泉の動向を中心に考察を進め、状況に応じて嘯巖文蔚の事跡を加味していくことにしたい。

### 高原祖泉の法諱・道号

この人は法諱を祖泉といい、道号を高原と称しており、一に高原を高原と記している史料も存している。道号の高原または高原と法諱の祖泉の關係は、いうまでもなく高原から湧き出る清らかな泉に基づいている。大慧派の北磻居簡(敬叟、一一六四—一二四六)は祖泉と同時代を生きた禪者であるが、『北磻文集』巻六「銘」には「泉禪師高原銘」と題して、

或謂、水出高原、曰高原、則万斛泉源、不折地而出、又何謂也。或曰、高原陸地、不生蓮花。此彈偏擊小之辯、皆非吾之所謂道。為之銘。銘曰、

峻極兮層嶽、歸不レ可レ登、吾非二雲巔。迥闊兮埴窟、杳不レ可レ瞰、吾非二九淵。雖然、彼習夫宗深。曷嘗舍レ施分不レ扳不レ援。弦直兮砥平、哀レ今兮匪二中而辺、正因兮急難、思二鶴鶴兮在原。

という道号銘を残している。この「泉禪師高原銘」は潼川（四川省）通泉の出身であった居簡が同じ四川出身の蜀僧であった祖泉のために付与した道号銘であり、おそらく祖泉が参学期に同参であったか若干ながら先輩格であった居簡に対して道号銘を依頼し、これに応じて居簡が祖泉のために書き残したものである。高原というのは特定の出身地の地名に基づくというより、広く蜀地の高原を意味するものと見られ、祖泉という法諱に因んで自ら名乗ったか、参学した師匠などから付与されたものであろう。

また破庵派の無準師範（円照、仏鑑禪師、一一七七一—二四九）も『仏鑑禪師語録』巻五「偈頌」に「高原」と題して、  
仏祖仰望不及処、暗通二線幾何深。冰巖雪冷無人会、空瀉三斷崖千万尋。（正統藏二二一・四七四b）

という偈頌（道号頌）を残している。この偈頌が祖泉に呈した作であったか否かは定かでないが、祖泉と交友が深かった師範がこの道号頌を道友で年長と見られる祖泉に付与したのであれば、祖泉の孤高な一面を讃嘆していて興味深く、祖泉が高原を自らの道号として用いた意図も窺われよう。南宋初期には楊岐派の仏眼派の高庵善悟（一〇七四—一三三）という禪者がおり、南宋末期には破庵派に高峰原妙（普明広濟禪師、一一三八—一二九五）があつて、それぞれ祖泉と同じく「高」の字を道号に用いているが、中国禪林では用例としては比較的に少ない。日本の中世禪林でも仏光派の高峰頭日（仏国応供広濟国師、一二四一—一二三六）や法燈派の高山慈照（広濟禪師、一二六六—一三四三）などが道号に「高」を用いている。

## 高原祖泉の郷関

祖泉の出身地や俗姓に関しては『増集続伝燈録』に何ら記されていないが、『枯崖和尚漫録』巻中「建康府保寧即庵覺禪師」の項に、  
蜀諸老如<sup>二</sup>高原・即庵・石田・無準、道侶皆為<sup>二</sup>一時之重、猗歟盛哉。（正統藏一四八・八三b）

という記載が存しており、蜀（四川省）の出身である諸老の一人に「高原」として高原祖泉の名も挙げられている。これは破庵派の即庵慈覚に関する項であり、慈覚は同門の石田法薫（一一七二—一二四五）や無準師範とともに虎丘派（破庵派祖）の破庵祖先の法を嗣いだ高弟として知られる。そこに慈覚・法薫・師範と並んで祖泉も蜀地の出身者として道侶が当代に高かったとして挙げられており、蜀学が盛んであったさまを伝えている。当時、多くの蜀僧が江浙の地に進出して大刹の住持となり、多大の接化をなして活躍していたことも判明する。先に述べた大慧派の北磻居簡も同じく蜀僧であつて、潼川（四川省）の王氏の出身であつたとされる。

即庵慈覚は単に蜀僧とされるのみで具体的な出身地や俗姓などは定かでないが、石田法薫は眉州（四川省）眉山県の彭氏の出身で



あり、無準師範も劍州(四川省)梓潼県の雍氏の出身である。このほかにも祖泉は同じ蜀僧である松源派の石溪心月(仏海禪師、一一七七一—二五六)とも道交を結んでおり、心月も眉州(四川省)青神県の王氏の出身であつて、この時期には同じ蜀の地を郷関とする蜀僧らが浙江の諸寺に集い、同郷意識がきわめて高まつていたことが窺われて興味深い。

祖泉が具体的に蜀地のいづれに出生し、俗姓が何であつたのか、如何なる因縁で出家したのかなど、諸般の状況については定かでない。ただ、状況からして法薫や師範と同世代であつたか、若干ながら先輩格であつたものと見てよいだろう。およそ祖泉は乾道年間(一一六五—一一七三)の頃に出生しているものと推測される。おそらく祖泉は成都(四川省)の寺院などで出家得度し、戒壇で具足戒を受けて後、蜀地を離れて三峡を下り、行脚して遙か江浙の地へと赴いたものであろう。

四川の高地から東のかた浙江に下つた祖泉としては、蜀の高原から流れ下つた清らかな泉を仏祖の法統の流れに譬えた発想が深かつたものと見られ、そのため高原を道号として用いたものであろう。祖泉が如何なる遍参学道をしたのかは明確でないが、おそらく江浙の諸山において著名な禪匠のもとに参学した後、やがて本師となる楊岐派の退庵道奇(奇道者)のもとに投ずる因縁に恵まれたものであろう。

### 祖泉が鎮江府金山の退庵道奇に参じて法を嗣ぐ

蜀地を離れた祖泉が如何なる遍参歴遊をなしたのかは定かでないが、やがて祖泉は長江下流域に赴き、鎮江府(江蘇省)丹徒県の金山龍游禪寺に到つて楊岐派の退庵道奇に参学しており、ついに印可を得て法を嗣いでいる。祖泉の本師に当たたる退庵道奇については『増集統伝燈録』巻一「鎮江金山退庵道奇禪師」の章が存しているが、若干の問答と上堂を載せるのみで伝記的な記載は何ら見られない。わずかに幸いなものは『枯崖和尚漫録』巻上「退庵奇禪師」の項に、

退庵奇禪師、預<sup>二</sup>印別峰室于径山。別峰纔望<sup>三</sup>見其來、失喜下<sup>レ</sup>床接<sup>レ</sup>之、不<sup>レ</sup>復為<sup>レ</sup>衆拈話。退庵恐<sup>レ</sup>妨<sup>レ</sup>衆、後惟未<sup>レ</sup>至。住<sup>二</sup>金山、普説云、(中略)別峰三十餘年坐<sup>三</sup>曲象床、只得<sup>レ</sup>退庵一麟足矣。(中統歲一四八・七六a—c)

という簡略な記載が存していることであろう。道奇は出身地や俗姓および参学の過程などは定かでないが、杭州(浙江省)餘杭県の径山興聖万寿禪寺(かつて能仁禪院)に赴いて楊岐派の別峰宝印(恒寂・禅惠、慈辯禪師、一一〇九—一一九〇)の室に投じており、宝印は道奇を一見してその器量を認めたとされる。道奇の師匠である別峰宝印という禪者は嘉州大像(樂山大仏)で有名な嘉州(四川省)



の李氏の出身であり、法嗣である祖泉も蜀地の出身であることから、おそらく道奇も同様に蜀僧であった可能性が高いと推測される。道奇は仏道修行に対してきわめて一途であったことから、諸方の叢林では「奇道者」の異名をもって知られたものらしい。枯崖円悟は「別峰、三十余年、曲象床に坐し、只だ退庵を得て一麟足れり」と評しており、宝印が門下に道奇を得たことをあたかも六祖下の青原行思（弘治大師、？一七四〇）が門下に石頭希遷（無際大師、七〇〇—七九〇）ひとりを得たことに比している。また『叢林盛事』卷上「開善謙」の項に、

開善謙、頌心不是仏智不是道云、太平時節歳豊登、旅不費、粮戸不局、官路無人夜無月、唱歌帰去恰三更。妙喜最喜之。金山奇道者、別峰印之嗣、亦嘗以遲日江山麗、春風華艸香、泥融飛燕子、沙暖睡鴛鴦、頌之。亦不易得。時以為超師之作也。（正統蔵一四八・三七b）

という記事も存しており、建寧府（福建省）の開善禪寺の住持であった大慧下の密庵道謙が金山の道奇と交流が存し、当時、道奇は「超師の作」とありと称えられたことを伝えている。道謙が「心は是れ仏ならず、智は是れ道にあらず」という語句を頌して、太平の時節、歳は豊登なり。旅に糧を費らさず、戸は局さず。官路に人無く、夜に月無し。唱歌して帰去す、恰かも三更なり。

と詠じた際、師匠の大慧宗杲（妙喜）は最もこれを賞賛したとされる。この道謙の偈頌に対して後に金山に住した奇道者すなわち道奇はつぎのような偈頌を添えている。

遅日、江山は麗かに、春風にて華艸は香し。泥は融けて燕子飛び、沙は暖かにして鴛鴦睡る。

この道奇の偈頌は超師の作と評されたというから、おそらく道奇は参学期に開善寺の道謙のもとに投じて参学した経験が存したものであろう。道奇は動植物が生命を謳歌している春の風光をもって「心不是仏」の道理を表現している。

また『続古尊宿語要』第六輯には『金山退菴奇禪師語』（正統蔵一一九・七六c・八〇a）として道奇の語録の抜粋が伝えられており、上堂・小参・普説・頌古・賛祖師が収められている。上堂や小参の配列からして、道奇が鎮江府（潤州）丹徒県京口の圖山東霞禪寺や同じ丹徒県の焦山普濟禪寺さらに金山龍游禪寺に歴任していることが知られ、ほぼ鎮江府丹徒県内の禅刹に化導を敷いている。とくに道奇が拠点としていた禅刹は鎮江府の金山であったことから、祖泉が道奇に参学して坐禅辦道に努めて印可証明を得たのも金山でなされた消息と見てよいであろう。『破菴和尚語録』卷末に載る宗性編「行状」によれば、虎丘派（破庵派祖）の破庵祖先が金山に到つて道奇のもとで首座（第一座）を勤めたことが知られる。おそらく祖泉が最初に破庵下の即庵慈覚・石田法薫・無準師範ら

と知り合ったのも金山の道奇のものであったと思われ、無文道璨が撰した「径山無準禪師行状」によれば、師範は慶元二年(一一九六)に金山の道奇のもとに投じて親しく問答を交わしている。

道奇には『退菴和尚語録』といった表題の語録が編纂刊行されたものと見られ、『金山退菴奇禪師語』はこれを抜粋して『続開古尊宿語要』に収録したものである。しかも情況的に『退菴和尚語録』の編集刊行には法嗣の祖泉が深く関わっていたことは想像するに難くない。『枯崖和尚漫録』巻上「高原泉禪師」の項に「壯歳時、已得<sup>二</sup>奇退庵許与<sup>一</sup>矣」(正統歲一四八・七九a)とあるから、祖泉は壯歳すなわち三〇歳頃に道奇のもとで印可証明を得たものらしい。この点、祖泉が如何なる機縁で道奇から印可を得たのか、何も伝えられていないのは惜しまれてならない。

道奇の法を嗣いだ門人に關しては、『増集統伝燈録』や日本の宗派図などでは祖泉ただ一人しか記されていない。このため道奇が生涯かけて育成した高弟が祖泉のみであったかのごとき印象を受けるが、円爾將來『宗派図』にのみ「退菴奇禪師」の法嗣として「高原泉禪師」とともに「洪山辨禪師」「薦福円禪師」の名が記されており、祖泉のほかにも道奇の法嗣として洪山□辨と薦福□円という二禪者が存したことが知られる。この中で薦福□円が住持した薦福とは饒州(江西省)鄱陽県の東湖薦福禪寺を指すものと見られるが、洪山□辨が住持した洪山とは随州(湖北省)隨県の大洪山保寿禪院のことを指しているのであろうか。

祖泉が金山の道奇のもとで印可を得て後、さらに何れに遍參歴遊したのかは定かでないが、おそらく蜀僧の一人として江浙の大刹で首座など主要な頭首の職位を歴任していたものと見られる。また江浙の大刹に掛錫して修行していた当時、祖泉は諸禪刹で浙僧である如淨や蜀僧である石田法薰・無準師範らと親しく知り合う機会に恵まれたものであろう。

### 台州恵因寺の妙峰之善を推挙する

さらにいまだ出世する以前と見られるが、祖泉が大慧派の妙峰之善(老劉、一一五二—一二三五)と関わりを持った消息が伝えられている。『枯崖和尚漫録』巻上「妙峰善禪師住台州恵因<sup>二</sup>」の項に、

妙峯善禪師住台州恵因。開爐示衆云、翠雲隨例也開爐。撥<sup>二</sup>尽寒灰<sup>一</sup>火也無。豎<sup>二</sup>起扞子<sup>一</sup>云、拈<sup>二</sup>起死柴頭上底<sup>一</sup>。吹云、不<sup>レ</sup>知誰是赤鬚胡。高原問<sup>レ</sup>之、薦<sup>二</sup>於青山鄭公<sup>一</sup>。公云、見說他住<sup>二</sup>壞人院子<sup>一</sup>。原云、仏法也要<sup>二</sup>人撐拄<sup>一</sup>在。後居<sup>二</sup>臨安永教<sup>一</sup>、公果付下<sup>二</sup>省割<sup>一</sup>、請住<sup>二</sup>小瑞岩<sup>一</sup>。再見<sup>二</sup>仏照於育王<sup>一</sup>、以<sup>二</sup>風幡語<sup>一</sup>、直<sup>二</sup>箭鋒機<sup>一</sup>。仏照贈<sup>レ</sup>之<sup>二</sup>以<sup>二</sup>偈云<sup>一</sup>、今日為<sup>レ</sup>君通<sup>二</sup>一線<sup>一</sup>、斬<sup>レ</sup>丁截鉄起<sup>二</sup>吾宗<sup>一</sup>。妙峰劉氏、晚年叢林以<sup>二</sup>老劉<sup>一</sup>呼<sup>レ</sup>之。(正)

と記されており、祖泉が大慧派の妙峰之善とも関わりを持つていたことが知られる。妙峰之善は彭城(四川省)の劉氏出身の蜀僧であり、大慧派の拙庵徳光(仏照禪師)の法を嗣いでいる。之善が台州(浙江省)の恵因禪寺に開堂出世したときに「開爐上堂」で、開爐に衆に示して云く、「翠雲、例に随つて也た爐を開く、寒灰を撥尽するに火も也た無し」と。弘子を竖起して云く、「死柴頭上に拈起する底」と。吹いて云く、「知らず、誰か是れ赤鬚胡なる」と。

と語つたとされる。この上堂示衆を聞いていた祖泉は青山鄭公すなわち後に丞相となつた鄭清之(字は文叔・徳源、号は安晩、一一七六一―一二五二)に之善のことを推薦したというのである。当時、祖泉は鄭清之と関わる因縁が存したことになり、状況的には鄭清之が台州府主であつたときであろうか。祖泉の進言に鄭清之は「見説らく、他は人の院子を住壊すと」と述べている。これに対して祖泉は「仏法も也た人の撑拄せんことを要す」と答えたとされる。後に之善が杭州臨安府内の永教寺に居していたとき、鄭清之は省劄を下して之善を台州黄巖県の瑞巖浄土禪院の住持に拜請している。台州瑞巖寺は一に小瑞巖とか小翠巖と呼称される名刹であり、後に祖泉自身もまたこの寺に住持する因縁に恵まれている。その後之善はさらに明州鄞県の阿育王山広利禪寺に赴いて再び大慧派の拙庵徳光に相見し、晩年の徳光よりその禪機を証明されたと伝えてい<sup>(15)</sup>る。祖泉が之善や鄭清之と関わりを持つたのは開堂出世する以前のこと、いまだ修行時代の時期と見てよいであろう。ちなみに鄭清之は之善が示寂して後は楊岐派の無門慧開(仏眼禪師、一一八三―一二六〇)に参禅し、親しく慧開の禪風を受けている<sup>(16)</sup>。

#### 四明山の梨洲寺に開堂出世する

その後、祖泉は明州鄞県の四明山中に存した梨洲禪寺という禪刹に開堂出世する因縁に恵まれている。『枯崖和尚漫録』巻上「高原泉禪師」の項によれば、

高原泉禪師、住<sup>二</sup>梨洲、荒陋寂寥。無準為<sup>三</sup>首座、荆叟為<sup>四</sup>維那、雙杉在<sup>五</sup>会下。原夜坐拳、江月照松風吹、永夜清霄何所為。荆叟曰、颯著水河連底凍。雙杉曰、牽来好与<sup>二</sup>頂門槌。原默然。壯歲時已得<sup>二</sup>奇退庵許与<sup>三</sup>矣。(正統藏一四八・七九a)

として梨洲寺における祖泉の活動のさまが伝えられている。南宋末元初の文人である戴表元(字は帥初・曾伯、号は剡源、一二四四―一二一〇)は『剡源戴先生文集』巻一九「題<sup>二</sup>雪竇行紀後<sup>一</sup>」に、

四明洞天之麓、有三僧刹。其陰為梨洲・杖錫、而其陽為雪竇。比三刹稍寬敞、又近於人境、遊覽之所易。(中略)而梨洲・杖錫、儼然如在目前。

と記して梨洲寺について簡略に説明している。杖錫とは明州鄞県西南二〇里に存した杖錫山(二に杖錫山)延勝禪院のことであり、雪竇はいうまでもなく明州奉化県の雪竇山資聖禪寺のことである。「題雪竇行紀後二」によれば、梨洲寺は杖錫寺とともに四明山の山陰に存し、山陽の明州奉化県に位置する雪竇山資聖禪寺とともに四明山洞天の山麓にあつて三僧刹と称せられている。とりわけ梨洲寺と杖錫寺の両寺は鄞県でも奉化県との県境に位置し、人境を絶したような山間に建立されていたものらしい。『四明山志』卷一「名勝」の「梨洲山」の項には、

梨洲山、晋孫興公与兄承公同遊於此、得梨数枚。人跡杳然、疑為仙真所遺、故名其地曰梨洲。興公天台賦曰、涉海則有方丈蓬萊、登陸則有天台四明、皆支聖之所遊化、靈仙之所窟宅也。是蓋身逢玄怪、非虚言也。杜光庭福地記曰、四明山在梨洲、魏道微上升処為第五十九福地也。四明既在第九洞天之数、而又列福地者、此專指梨洲為言也。十道四蕃志曰、劉綱与夫人一升仙処、故有指樊樹在梨洲者、事遠難稽、豈當時大蘭之称、可以統羣山乎。山麓有碑云、周回八百里、二百八十峰、峰峰相次、中頂五峰、狀如蓮花、近星斗。亦不知何人所刻。石窓之水、出於梨洲、其草木多異、有胡桃天蓼。有坡曰響石坪。

とあり、同じく『四明山志』卷二「伽藍」の「梨洲寺」の項にも、

梨洲寺。剡源戴表元曰、四明洞天之麓、有三僧刹。其陽為雪竇、其陰為杖錫・梨洲。梨洲寺、咸通十一年、僧曇遠建。今廢。

と記されている。梨洲寺は四明山の洞天の麓にあつて人跡を絶した地に存したとされ、南の陽に雪竇山資聖寺があり、北の陰に杖錫寺と梨洲寺があつて、この三カ寺は「四明洞天の三僧刹」と称せられていたものらしい。梨洲寺は唐末の咸通二年(八七〇)に僧曇遠によつて創建されたと伝えられる。

このとき梨洲寺に住持した祖泉を補佐すべく集つた諸禪者として、破庵派の無準師範が首座を務めていたことが知られるとともに、楊岐派の荆叟如珏(仏心禪師、一一二六四)が維那を務め、虎丘派の雙杉中元が修行僧の一人として会下に在つたことを伝えている。如珏は圜悟克勤より此庵景元一或庵師体一癡鈍智穎一荆叟如珏と嗣承し、楊岐派の癡鈍智穎の法を嗣いでいる。一方の雙杉中元は虎丘派の禪者で、虎丘紹隆一応庵曇華一密庵咸傑一萬庵致柔一雙杉中元と嗣承し、密庵下の萬庵致柔の法を嗣いでいる。『枯崖和尚漫録』によれば、夜坐のときに祖泉が「江月照らし松風吹く、永夜の清霄、何の所為ぞ」と説示すると、これに応じて如珏

は「颯著すれば氷河は連底に凍る」と答え、中元も「牽き来たりて好し、頂門の槌を与うるに」と答えたとされ、祖泉は両者の答えに黙って頷いたと伝えられる。

大慧派の無文道璨（柳塘、一一二四—一二七二）の詩文集である『無文印』巻四「行状」に載る「径山無準禪師行状」にのみ、破庵派の無準師範が梨洲寺の祖泉と関わった事蹟が伝えられており、

破庵退<sub>レ</sub>穹窿、帰<sub>レ</sub>径山。師往省候。破庵還寂、付<sub>レ</sub>密庵法衣頂相。師不<sub>レ</sub>受、惟領<sub>レ</sub>円悟墨跡及密庵法語。既拳<sub>レ</sub>喪、遂訪<sub>レ</sub>旧友巖雲巢于穹窿、与<sub>レ</sub>首<sub>レ</sub>衆。雲巢遷<sub>レ</sub>瑞光、復居<sub>レ</sub>板首。無<sub>レ</sub>何、泉高原有<sub>レ</sub>四明梨洲命、高原謂<sub>レ</sub>人曰、範首座肯往、吾当<sub>レ</sub>一行。不<sub>レ</sub>然、雖<sub>レ</sub>兜率内院不<sub>レ</sub>往也。師遂与<sub>レ</sub>俱。四明諸山、以<sub>レ</sub>杖錫爲<sub>レ</sub>高絶。而梨洲距<sub>レ</sub>杖錫、又<sub>レ</sub>二十里、寺在<sub>レ</sub>絶頂、高寒荒落、非<sub>レ</sub>人所<sub>レ</sub>居。師婆<sub>レ</sub>婆其上。三年如<sub>レ</sub>一日、麻麦粟豆、僅給<sub>レ</sub>日食、而未<sub>レ</sub>嘗有<sub>レ</sub>飢色。既而以<sub>レ</sub>台牖未<sub>レ</sub>到、拉<sub>レ</sub>月石溪同游至<sub>レ</sub>瑞巖。時雲巢領<sub>レ</sub>住持事、留分座。（<sub>レ</sub>正統藏一一・四八四b—c）

という記載が存している。晩年、径山で西堂に居していた破庵祖先が嘉定四年（一二二二）に示寂した後、師範は蘇州（江蘇省）呉門の穹窿山福臻禪院に赴き、旧友である松源下の雲巢道巖（巖猷）のもとで首座を勤めており、その後まもなく祖泉が明州鄞県の四明山の絶頂にある梨洲禪寺に開堂出世した際にも、やはり師範は祖泉のもとを訪れて三年間にわたって首座を勤めたとされる。この点は『枯崖和尚漫録』巻中「建康府保寧即庵覺禪師」の項にも、

建康府保寧即庵覺禪師、嘗与<sub>レ</sub>無準同參<sub>レ</sub>破庵。後因<sub>レ</sub>無準山居、寄以<sub>レ</sub>偈云、吸<sub>レ</sub>松風飽<sub>レ</sub>山色、浩養未<sub>レ</sub>妨清徹骨、夢覺千崑香霧分、興来一笑乾坤窄。霽霞凝雪翠滴滴、泉瀉<sub>レ</sub>断崖声瀝瀝、故人斯柴我何知、遐跂白雲抱<sub>レ</sub>幽石。送<sub>レ</sub>高原住<sub>レ</sub>梨洲云、小玉声中認<sub>レ</sub>得些、至今兩眼尚眯麻、阿師不<sub>レ</sub>雪、鄉人耻<sub>レ</sub>、鼎鼎教<sub>レ</sub>誰辨<sub>レ</sub>正邪。蜀諸老如<sub>レ</sub>高原、即庵、石田、無準、道伽皆爲<sub>レ</sub>一時之重、猗歟盛哉。（<sub>レ</sub>正統藏一四八・八三b）

とあり、法薰や師範と同門に当たる破庵派の即庵慈覚が詠じた「無準山居」に寄せた偈頌と「送<sub>レ</sub>高原住<sub>レ</sub>梨洲」という偈頌が載せられている。慈覚が詠じた「送<sub>レ</sub>高原住<sub>レ</sub>梨洲」の偈頌を書き下せば、つぎのごとくならう。

高原の梨洲に住するを送るに云く、

小玉声中、些を認得するも、今に至るまで両眼は尚お眯麻す。阿師が雪がずんば郷人の耻なり。鼎鼎に誰をしてか正邪を辨せしめん。

この偈頌は祖泉が梨洲寺に住持するのに際して慈覚が饒別に送った作であり、郷人とは慈覚が祖泉や石田法薰・無準師範らと同じ蜀僧であったことに依るから、この偈頌によっても祖泉が蜀地の出身であったことが知られる。「小玉声中」とは「頻呼<sub>レ</sub>小玉二元無<sub>レ</sub>事」の語句に由来するものであり、窓の外にいる相手に対して自身の存在を知らせるために用もないのに「小玉」と雇い人の名



を呼ぶ故事をいう。ここではことばの裏にある真意、文字の奥にある禅の深い境地を真に会得する意味として用いられている。<sup>(20)</sup>

同じく『枯崖和尚漫録』巻上「高原泉禪師」の項には、

高原泉禪師、令問素著、瑞<sup>二</sup>世慶元梨洲<sup>一</sup>。有問、囊錘已露、至宝難<sup>レ</sup>藏。四衆側聆、願聞<sup>二</sup>法要<sup>一</sup>。曰、截<sup>レ</sup>舌有<sup>レ</sup>分。問、恁麼則一句超<sup>二</sup>今古<sup>一</sup>、禪徒息<sup>二</sup>万機<sup>一</sup>。曰、又恁麼去也。問、如何是梨洲境。曰、猿啼<sup>二</sup>古木<sup>一</sup>、月照<sup>二</sup>高峰<sup>一</sup>。問、如何是境中人。曰、匙挑不<sup>レ</sup>上。問、人境已蒙<sup>二</sup>師指示<sup>一</sup>、向上宗乘事若何。曰、且待<sup>二</sup>驢年<sup>一</sup>。四衆拭目傾<sup>レ</sup>耳。(正統藏一四八・七八a)

という記事も伝えられている。これは祖泉が梨洲寺で如何なる学人接化をなしていたかを知る上で貴重であり、書き下して見るならば、つぎのごとくならう。

高原泉禪師、令問は素より著れ、慶元の梨洲に瑞世す。問うもの有り、「囊錘已に露われ、至宝は藏し難し。四衆は側かに聆く、願わくは法要を聞かん」と。曰く、「截舌に分有り」と。問う、「恁麼ならば則ち一句は今古を超え、禪徒は万機を息む」と。曰く、「又た恁麼にし去るや」と。問う、「如何なるか是れ梨洲の境」と。曰く、「猿は古木に啼き、月は高峰を照らす」と。問う、「如何なるか是れ境中の人」と。曰く、「匙挑し上げえず」と。問う、「人境已に師の指示を蒙る、向上宗乗の事は若何ん」と。曰く、「且らく驢年を待て」と。四衆、目を拭い耳を傾く。

令問とは令名すなわち良い評判のこと、祖泉が世間の好評価を受けて梨洲寺に出世したことをいう。つづいて祖泉が学人と交わした五つの問答が記されており、瑞世開堂した祖泉が山間の梨洲寺で真摯に学人と対峙していたさまが窺われる。このように祖泉が梨洲寺で行なった消息がいくつかわげられることから、祖泉は梨洲寺で化導を敷いた期間がいくぶん長く、多くの禪者が祖泉を助化すべく梨洲寺に参集していた状況が窺えて微笑ましい。<sup>(21)</sup> 梨洲寺に集った修行僧たちは祖泉が問い掛けに対してどのように答えるか目を拭い耳を傾けて聞き入ったとされる。

### 蘇州高峰寺に開堂した石田法薫を助化する

ついで、石田法薫が蘇州の高峰禪寺に出世開堂することとなり、先とは逆に法薫の晋山住持に際し、祖泉は古くからの道友らとともに高峰寺に赴いて法薫の化導を助化している。『物初贖語』巻二四「石田禪師行状」や『石田和尚語録』巻末「行状」によれば、俄出<sup>二</sup>世蘇之高峯<sup>一</sup>、瓣香為<sup>二</sup>破菴<sup>一</sup>拈出。高峯叢爾利、勞苦戢縮、以身率<sup>レ</sup>之。未<sup>二</sup>三年<sup>一</sup>為改<sup>レ</sup>觀。次遷<sup>二</sup>楓橋<sup>一</sup>、衆繩繩然。有<sup>レ</sup>輩行<sup>二</sup>高德<sup>一</sup>、高原泉・無準範・即庵寛・石溪月五六人、相伴而住。(正統藏一一二・三九b)



と記されており、この点は『石田和尚語録』卷一の冒頭にて松源派の石溪心月が序文を寄せて、

高峯小寺、石田最初說法所也。有<sub>二</sub>单丁<sub>一</sub>昼乞<sub>二</sub>村落之風<sub>一</sub>。開爐日、欲<sub>レ</sub>聚<sub>二</sub>泥人<sub>一</sub>聽<sub>レ</sub>法、泥人亦不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>得。時高源・無准・即菴・中岳照、与<sub>レ</sub>余偕至。(正統藏一三二・一a)

と書き残していることから、その間の事情を別に窺うことができる。また『枯崖和尚漫録』卷中「石田薫禪師」の項にも、

石田薫禪師、眉山彭氏。嘉定間、出<sub>二</sub>世高峰<sub>一</sub>、屋老僧殘。先是高源・無準・即庵・中岳・石溪諸老、徐之然後請<sub>レ</sub>住。開爐上堂云、高峰門戸如<sub>二</sub>灰冷<sub>一</sub>、多謝諸公有<sub>二</sub>歲寒<sub>一</sub>、些子死柴頭上火、大家着<sub>レ</sub>力試吹看。石田住<sub>二</sub>吳門高峰<sub>一</sub>、寥寥荒寒、過<sub>レ</sub>於法昌在<sub>二</sub>分寧<sub>一</sub>時<sub>上</sub>。開爐高原宿德咸集又差、勝<sub>レ</sub>以<sub>二</sub>一力<sub>一</sub>搥<sub>レ</sub>鼓、為<sub>二</sub>十八泥人<sub>一</sub>說法也。(正統藏一四八・八四a)

と同様の記事が記されている。法薫が蘇州の高峰寺に開堂出世した際、一〇月一日の開爐に会わせて道旧の高原祖泉・無準師範・即庵慈覚・中岳照・石溪心月らが助化のために法薫のもとに参集しており、彼らはみな蜀地出身の禪者(蜀僧)たちであったとされる。このとき法薫は本師の破庵祖先のために嗣承香を焚いて破庵派の禪者として活動を開始している。ちなみに「十八泥人のために說法す」とある泥人とは泥人形の意であるが、塑像の十八羅漢像のことであろう。この点は『増集統伝燈録』卷三「杭州靈隱石田法薫禪師」の章にも、

久之出<sub>二</sub>世蘇之高峯<sub>一</sub>、次遷<sub>二</sub>楓橋普明<sub>一</sub>。行輩有<sub>二</sub>高原泉・無相範・即庵覺・石溪月<sub>一</sub>、相依而住。(正統藏一四二・三九四b)

と載せられているが、ここに松源下の無相<sub>□</sub>範の名が存するのはおそらく無準師範の誤りであろう。石田法薫は嘉定七年(一二一四)閏九月に蘇州吳県(吳門)西南の胥山高峯禪院に入院開堂し、嘉定八年(一二一五)正月には中唐の張繼(字は懿孫、張祠部、?―七七九?)が詠じた「楓橋夜泊」の詩で有名な蘇州吳県の楓橋普明禪寺(寒山寺)に遷住しているから、この時期の祖泉の動向が知られる。ただし、この中で「中岳」とある禪者については事跡が定かでない。『枯崖和尚漫録』卷中「中岳寂禪師」(正統藏一四八・八三c)の項に載る中岳<sub>□</sub>寂のことを指しているのか、あるいは「石田和尚語録」の序文にある中岳<sub>□</sub>照という禪者のことなのか。中岳寂と中岳照に関しては如何なる禪者の法嗣であったのか、ともに嗣承関係など辿れないのが惜しまれる。このように祖泉は法薫を助化すべく蘇州吳県西南の高峰禪院に赴いているわけであるが、このときの祖泉の立場が梨洲寺の現住のままであったのか、それとも住持職を退いていたのかも定かでない。

### 越州山陰県の天衣禪寺に遷住する

その後、祖泉は越州（浙江省）の天衣寺すなわち越州紹興府山陰県の法華山天衣禪寺に遷住している状況が知られている。この点は『枯崖和尚漫録』や『増集続伝燈録』に何も記載がなく、大慧派の物初大観（二二〇一—二二六八）の詩文集である『物初賸語』巻二四「行状」の「西巖禪師行状」（『西巖和尚語録』巻末「行状」も同文）に、

乃東<sub>一</sub>包出<sub>二</sub>三峽、由<sub>三</sub>湖湘而至<sub>四</sub>江浙、見<sub>五</sub>浙翁琰於<sub>六</sub>徑山。聞<sub>七</sub>天衣高源泉孤硬徑直、往依<sub>八</sub>之。同<sub>九</sub>枯寂甘如<sub>十</sub>飴。（『正統藏』二二二・一八五c）

という記事が存することによって知られ、やがて無準師範の法を嗣ぐことになる破庵派の西巖了慧（二一九八—二二六二）が越州の天衣寺に祖泉を訪ねて参学している。了慧が参学期になした動向を踏まえることで、祖泉が天衣寺に住持していた事実やその時期も窺うことができる。『増集続伝燈録』巻四「四明天童西巖了慧禪師」の章にも、

属<sub>一</sub>令南詢、乃<sub>二</sub>参<sub>三</sub>浙翁琰於<sub>四</sub>徑山。聞<sub>五</sub>高源泉為人徑直、心慕<sub>六</sub>之。（『正統藏』一四二・四〇六a）

とあり、ここでは祖泉の住持地は記されていないが、了慧が祖泉（高源）に参学せんとしたことを伝えている。了慧は蓬州（四川省）蓬池の羅氏出身の蜀僧であり、出家受具した後、南詢して浙江に到り、最初に杭州餘杭県の徑山興聖万寿寺に上つて大慧派の浙翁如琰（仏心禪師、一一五一—一二三五）に参じている。如琰が杭州の徑山に住持したのは嘉定十一年（一二二八）のことであり、了慧はその頃に如琰に参学したものであろう。このとき同じ蜀僧の祖泉が為人接化に徑直であることを伝え聞き、了慧は祖泉を慕うようになったものらしい。そんな折りに祖泉が越州山陰県の法華山天衣禪寺に遷住したことを知り、了慧は天衣寺に到つて祖泉のもとに投じている。このように「西巖禪師行状」によつて祖泉が天衣寺に住持した事実が判明するわけである。

すでに触れたごとく天衣寺には北宋代に雲門宗の雪竇重顕の高弟である天衣義懷（振宗大師、九九三—一〇六四）が止住して宗風を挙揚したことで名高く、北宋代を代表する禅刹の一つであったといえよう。南宋初期には雲門宗の天衣如哲（？—一一六〇）や曹洞宗の天衣法聡などが住持しており、南宋後期に祖泉が天衣寺に化導を敷き、さらに祖泉の後席を継いで天衣寺に住持したのが嘯巖文蔚であったものと見られ、この点に関しては後に触れたい。

## 台州黄巖県の瑞巖浄土禅院に遷住する

その後、祖泉は台州（浙江省 黄巖県の瑞巖浄土禅院（台州瑞巖寺）に入寺する因縁に恵まれている。台州の瑞巖寺といえは、かつて如浄が住持した禅刹として知られ、『如浄和尚語録』にも「台州瑞岩禅寺語録」（大正蔵四八・一三三a-c）が収められている。台州黄巖県の瑞巖寺は唐末五代に青原下の瑞巖師彦（空照禅師）が示した「瑞巖主人公」の公案ゆかりの禅刹として名高い。瑞巖寺には祖泉に先立って大慧派の浙翁如琰や曹洞宗の長翁如浄が住持しており、さらに入宋した道元が大慧派の盤山思卓（卓老）に参じた台州小翠巖とはこの台州瑞巖寺の別称と見られている。おそらく道元が思卓に参学してまもない頃に、瑞巖寺では住持が思卓から祖泉へと交代しているものである。祖泉が台州瑞巖寺に住持したことを伝えるのは『物初贖語』巻二四「行状」の「西巖禅師行状」や『西巖和尚語録』巻下「行状」であり、

泉遷<sub>レ</sub>台<sub>レ</sub>之瑞巖、令<sub>二</sub>師与俱。泉問、山河大地、是有是無。擬<sub>レ</sub>開<sub>レ</sub>口即喝出。以<sub>レ</sub>偈呈、即曰、没交涉。偶侍次、令<sub>レ</sub>書龍門三百省・白楊示衆語。泉問<sub>レ</sub>之笑曰、写<sub>レ</sub>字与<sub>レ</sub>做<sub>二</sub>言句儘得、争<sub>二</sub>奈没交涉<sub>一</sub>何。師憤悱莫<sub>レ</sub>伸。泉云、吾方便婁矣、汝自不<sub>レ</sub>顧、蓋縁法不<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>此、其見<sub>二</sub>雪竇<sub>一</sub>乎。時主<sub>二</sub>竇席<sub>一</sub>者、仏鑑無<sub>レ</sub>準範也。（正統蔵二二・一八五c）

という機縁が記されている。『増集続伝燈録』巻四「四明天童西巖了慧禅師」の章にも、

適原赴<sub>二</sub>台之瑞巖。師与俱往。一日原問、山河大地、是有是無。師擬<sub>レ</sub>開<sub>レ</sub>口。原即喝出。師復以<sub>レ</sub>偈呈。原曰、没交涉。師一日偶書<sub>二</sub>白楊示衆語<sub>一</sub>。原問<sub>レ</sub>之笑曰、写<sub>レ</sub>字与<sub>レ</sub>作<sub>二</sub>言句儘得、争<sub>二</sub>奈没交涉<sub>一</sub>何。師憤悱莫<sub>レ</sub>伸。原曰、吾方便屢矣、汝自不<sub>レ</sub>顧、蓋縁不<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>此、其往見<sub>二</sub>雪竇<sub>一</sub>乎。時無<sub>レ</sub>準主<sub>二</sub>雪竇<sub>一</sub>。師造<sub>二</sub>席下、自陳<sub>二</sub>來歴<sub>一</sub>。（正統蔵一四二・四〇六a-b）

とほぼ「西巖禅師行状」と同内容の記事が載せられている。「西巖禅師行状」の問答を書き下せば、およそつぎのごとくなる。

泉、台の瑞巖に遷り、師をして与俱に往かしむ。泉問う、「山河大地は是れ有るか是れ無きか」と。口を開かんと擬るに、即ち喝して出だす。偈を以て呈するに、即ち曰く、「没交涉」と。偶たま侍する次いで、「龍門三百省」「白楊示衆語」を書せしむ。泉、之れを聞して笑いて曰く、「字を写すと言句を做すと儘く得るも、没交涉なるを争奈何せん。師、憤悱して伸ぶる莫し。泉云く、「吾が方便、婁しばなるに、汝自ら顧みず、蓋し縁法は此れに在らず、其れ雪竇に見えんか」と。時に竇の席を主る者、仏鑑無<sub>レ</sub>準範なり。

祖泉は越州の天衣寺から台州黄巖の瑞巖寺に赴く際に、会下に在った了慧を共に瑞巖寺へと随侍させている。したがって、状況

的に祖泉は天衣寺から即座に台州瑞巖寺へと赴いたものであろう。「西巖禪師行狀」によれば、瑞巖寺で祖泉は了慧と交した問答が伝えられている。龍門とは五祖門下の三仏のひとり、楊岐派(仏眼派祖)の龍門清遠(仏眼禪師、一〇六七—一一二〇)のことであり、その「龍門三百省」とは『禪門諸祖師偈頌』卷二(上之下)に、

仏眼三百省。

是身寿命、如<sub>レ</sub>駒過<sub>レ</sub>隙。何暇閑情、妄為<sub>二</sub>雜事<sub>一</sub>。既隆<sub>二</sub>積種<sub>一</sub>、須<sub>レ</sub>紹<sub>二</sub>門風<sub>一</sub>。諦<sub>二</sub>審先宗<sub>一</sub>、是何標格。

道業未<sub>レ</sub>辦、去<sub>レ</sub>聖時遙。善友師教、誠不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>捨。自生<sub>二</sub>勉勵<sub>一</sub>、念<sub>レ</sub>報<sub>二</sub>弘恩<sub>一</sub>。惟已自知、大心莫<sub>レ</sub>退。

報縁虚幻、豈可<sub>レ</sub>強為<sub>一</sub>。浮世幾何、隨<sub>二</sub>家豊儉<sub>一</sub>。苦樂逆順、道在<sub>二</sub>其中<sub>一</sub>。動靜寒温、自愧自悔。(正統藏一・一六・四六八a)

仏眼の三つの自省。

是の身の寿命は、駒の隙を過ぎるが如し。何の暇閑の情ありてか、妄りに雑事を為さん。既に積種に隆る、須らく門風を紹ぐべし。先宗を諦審す、是れ何の標格ぞ。

道業未だ辦ぜず、聖を去りて時遙かなり。善き友と師の教え、誠に捨つべからず。自ら勉勵を生じ、弘恩に報いんことを念ず。惟だ己れ自ら知り、大心、退くこと莫かれ。

報縁は虚幻なり、豈に強いて為すべけんや。浮世は幾何ぞ、家の豊儉に隨う。苦樂・逆順、道は其の中に在り。動靜・寒温、自ら愧じ自ら悔ゆ。として載る「仏眼三百省」のことであり、『緇門警訓』卷二にも「龍門仏眼禪師」三百省察(大正藏四八・一〇四八b)として載せられている。また「白楊示衆」とは『嘉泰普燈錄』卷一六「撫州白楊法順禪師」の章に、

示<sub>レ</sub>衆。染縁易<sub>レ</sub>就、道業難<sub>レ</sub>成。不<sub>レ</sub>了<sub>二</sub>目前<sub>一</sub>、万縁差別。只見<sub>二</sub>境風浩浩<sub>一</sub>、凋<sub>二</sub>殘功德之林<sub>一</sub>。心火炎夕、燒<sub>二</sub>尺菩提之樹<sub>一</sub>。道念若同<sub>二</sub>情念<sub>一</sub>、成仏多時、為<sub>レ</sub>衆一似<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>身。彼此事辨、不<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>他非己是<sub>一</sub>、自然上敬下恭。仏法日日現前、煩惱時時解脫。(正統藏一・三七・一一三三d—一一三四a)

衆に示していう、「染縁は就き易く、道業は成し難し。目前を了ぜざれば、万縁差別す。只だ見る、境風は浩浩として功德の林を凋残し、心火は炎夕して菩提の樹を焼き尽くすことを。道念、若し情念に同じて、成仏多き時には、衆の爲めにするごとく一に身の爲めにするに似たり。此の事辨すれば、他は非にして己は是なるを見ず、自然にも敬い下も恭しくす。仏法は日に現前し、煩惱は時に解脫せん」と。

として載る仏眼派の白楊法順(一〇七六—一一三九)が語る「示衆」のことを指すものであろう。法順は仏眼清遠の法を嗣いだ高弟であり、南宋初期に撫州(江西省)臨川県の白楊山仙林禪寺に住持している。「仏眼三百省」と「白楊示衆」はいずれも仏道修行にお

ける自省を述べており、祖泉としては了慧に更なる精進を促したことになる。このとき祖泉は了慧に対して瑞巖寺を離れて明州奉化県の雪竇山資聖禪寺に赴いて無準師範に参学することを勧めている。

祖泉と同時代を生きた大慧派の率庵梵琮の語録である『雲居率庵和尚語録』「訶偈」に、

寄台州瑞巖高原禪師住靈隱。

水出在高原、源深到冷泉、飲者禿却舌、嗅者鼻孔穿。口鼻両俱喪、妙用絶正偏、側耳与招手、聽猿同呼猿。藤蘿影裡石磊磊、双洞合流波漣漣。南來北來脚下過、欲知冷暖待驢年。(已統藏二二一・六四a)

という偈頌が収められているから、祖泉が台州黄巖県の瑞巖浄土禪院に住持していたことがこの偈頌でも確かめられる。台州瑞巖寺はおそらく台州小翠巖のことであり、日本僧道元が在宋中に参学した大慧派の盤山思卓(卓老)が住持していた禪刹であるから、祖泉は思卓の後席を継いで台州瑞巖寺に住持していたものであるうか。とすれば、祖泉が瑞巖寺に住持していた期間は嘉定一七年(一二二四)から宝慶三年(一二二七)の頃に限られていたことになる。

一方、了慧は祖泉の勧めを受けて明州奉化県の雪竇山資聖禪寺へと赴き、やがて本師と仰ぐ無準師範に参学することになる。師範は宝慶三年の春から夏の頃に雪竇山から明州鄞県の阿育王山広利禪寺に遷住しているから、了慧はそれ以前に雪竇山の師範のもとを訪ねていることになろう。『石刻史料新編』第三輯第八卷に所収される『鄞県志』卷五九「金石上」に「天童寺別山智禪師塔銘、在天童中峯庵」として「慶元府太古名山天童景德禪寺第四十代別山智禪師塔銘」が収められており、同じく無準下の別山祖智(智天王、二〇〇―二六〇)が参学期になした動静として、

十九歳、往成都昭覺、依物牛全、始学出世法。後出峡抵公安、聞僧誦六巖語喜之、徑往蘇之穹隆謁巖。巖著之堂中。因閱華嚴法界品善財見弥勒樓閣因緣、入已還閉之語、恍然如夢而覺、如醉而醒。遂頌靈雲見桃花機緣云、万緑叢中紅一点、幾人欲喜幾人嗔。巖頷之。随衆二年、往見浙翁琰、無際派・高源泉・淳庵浄・妙峯善、皆有頭角之誉。最後見無準師範於雪竇。

という記事が載せられている。祖智は一九歳のとき嘉定一一年(一二二八)に成都(四川省)の昭覺禪寺にて始めて仏法を学び、その後、三峡を下って蘇州呉県西南の穹隆山福臻禪院に到って楊岐派の殺六巖□輝に謁しており、二年を経て再び諸方行脚に出て浙翁如琰・無際派・高原祖泉・淳庵善浄・妙峰之善らに参学したとされる。この中で如琰と了派と之善は大慧派の拙庵徳光の法嗣であり、善浄は楊岐派の息庵達観の法嗣であり、嘯巖文蔚とは同門に当たっている。時期こそ明確でないが、祖智はこうした諸禪者

に参じた後に了慧と同じように雪竇山の無準師範のもとに投じていることから、おそらく祖智が祖泉に参学したのも台州瑞巖寺であつたと見てよいだろう。

また『癡絶和尚語録』巻下「径山癡絶和尚法語」の「示<sub>二</sub>惠済蔵主<sub>一</sub>」に、

此去天台、瑞岳有二大導師、名曰<sub>二</sub>高原<sub>一</sub>、達<sub>二</sub>法源底<sub>一</sub>、善説<sub>二</sub>法要<sub>一</sub>。到<sub>レ</sub>彼炷香作札、而問曰、如何是達磨<sub>レ</sub>来事。此老必為説破。却款款来<sub>二</sub>鍾山<sub>一</sub>、請<sub>二</sub>木上座<sub>一</sub>、為<sub>レ</sub>汝証明。(正統藏二二・二七六d)

という記事が残されている。曹源派の癡絶道冲(玉山、一一六九—一二五〇)が鍾山すなわち建康府(南京)上元県の蒋山太平興國禪寺に住持していた折、門下に在った蔵主惠済に対し、台州瑞巖寺に住持していた祖泉を大導師として紹介しており、祖泉に「達磨来<sub>レ</sub>東土<sub>二</sub>」の真意を問うように指示している。惠済が実際に瑞巖寺の祖泉のもとに参学したか否かは定かでないが、道冲が日頃から祖泉を高く評価していたさまが窺えて興味深いものがある。

### 杭州錢塘県の北山景德靈隠禪寺に陞住する

台州瑞巖寺に化導を敷いていた祖泉はさらに杭州錢塘県の北山景德靈隠禪寺に陞住する因縁に恵まれている。靈隠寺は杭州錢塘県西北の靈隠山(武林山)に存する北山景德靈隠禪寺のことであり、古くインド僧慧理が訳経に従事した地とされる。五代に呉越王が五百羅漢を安置して法眼宗の永明延寿(智覚禪師、九〇四—九七五)を拜請して堂宇を整え、北宋代に景德靈隠禪寺と称する。南宋代には楊岐派の睦堂慧遠(弘海禪師、一一〇三—一一七六)や虎丘派の松源崇嶽(老聶翁、一一三二—一二〇二)などが住持しており、やがて禪宗五山の第二位に列している。寺志として光緒一四年(一八八八)に刊行された『靈隠寺志』八巻が存する。『扶桑五山記』一「靈隠住持位次」によれば、

廿九、弘行大禪師。三十、枯禪鏡禪師。卅一、高原泉禪師。卅二、咲翁堪禪師。卅三、妙峰善禪師。卅四、石田薰禪師。(玉村本・二六頁)

と伝えられており、祖泉の前後に靈隠寺に住持した禪者として「枯禪鏡禪師」と「咲翁堪禪師」の名が知られる。第三〇世の枯禪鏡禪師とは虎丘派の枯禪自鏡のことであるから、祖泉は自鏡の後席を継いで靈隠寺の第三二世として入院していることになる。

これより先、大慧派の少林妙崧(弘行禪師、一一三三)が靈隠寺の住持であつたとき、妙崧と同門に当たる浙翁如琰が宝慶元年(一二二五)七月一七日に世寿七五歳で示寂しており、妙崧が如琰の後席を継いで径山に勅住すると、自鏡が福州(福建省)閩県の鼓山



湧泉禪寺から靈隱寺へと入寺している。自鏡は天童山の如浄の後席を継いで宝慶三年（一二二七）の秋から冬の頃には天童山に入院していることから、祖泉が靈隱寺に住持したのも宝慶三年の冬頃か紹定元年（一二二八）の春頃に当たろう。

すでに触れたごとく大慧派の率庵梵琮は『雲居率庵和尚語録』『訶偈』に「寄台州瑞巖高原禪師住靈隱」という偈頌を残しているが、その詩文集である『率庵外集』にも「寄靈隱泉老」と題するつぎのような偈頌が載せられている。

寄靈隱泉老<sup>一</sup>

白髮元無種、青春喜快哉。而今居<sup>二</sup>輦寺、元不離<sup>三</sup>天台。明月鎖<sup>四</sup>松徑、枯藤絆<sup>五</sup>石臺。冷泉如<sup>六</sup>是住、飛去又飛來。

この偈頌は梵琮が靈隱寺の祖泉に寄せた偈頌であり、おそらく修行時代を共にしたであろう青春の日々と老齢に達して白髪となった姿を対比させており、台州の瑞巖寺から国都（輦下）の靈隱寺にやって来たこと、松並木に鎖された明月、石段の枯藤など自然の風光に恵まれた靈隱寺（冷泉）のありよう、靈隱寺山中の飛來峰のことなどが詠じられている。

一方、祖泉が遷住して去った台州瑞巖寺では、まもなく大慧派の無量宗寿が新たな住持に拝請されており、そのもとで楊岐派の無門慧開（仏眼禪師、一一八三—一二六〇）が首座として『無門闕』を提唱していることは名高い。

## 示寂と後事

祖泉が紹定元年（一二二八）一〇月に『如浄和尚語録』に跋文を寄せ、さらに紹定二年（一二二九）六月に祖泉の校勘を経た『如浄和尚語録』が開版されているが、そのことについては後段で別箇に詳しく取り上げたい。この事業に深く関わった祖泉はその直後まもなく遷化のときを迎えている。無準師範の『仏鑑禪師語録』巻一「住慶元府阿育王山広利禪寺語録」に、

靈隱高原和尚訃音至上堂。来無<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>從、南高峯北高峯。去無<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>至、東澗水西澗水。幻泡忽滅、証<sup>三</sup>得烏龜成<sup>二</sup>白鱉。清風未<sup>レ</sup>已、須<sup>レ</sup>信<sup>二</sup>高原元<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>死。既不<sup>レ</sup>死、且道、在<sup>二</sup>什麼處。拈<sup>三</sup>起拄杖<sup>二</sup>云、見麼見麼。卓<sup>一</sup>一下云、認者依前不<sup>レ</sup>相似。（正統藏二二・四三七c）

という上堂が存する。これは『仏鑑禪師語録』の上堂語の配列からして、紹定二年の二月の上堂と六月九日の「破庵和尚忌辰拈香」の間に存しているから、祖泉は『如浄和尚語録』の刊行を待つことなく靈隱寺現住として紹定二年の春から夏にかけての頃に示寂していることになろう。一方、大慧派の北磻居簡も『北磻和尚語録』『常州顯慶禪寺語録』に、

高原和尚訃至上堂。二月十一、人從<sup>二</sup>北山<sup>一</sup>来、報<sup>二</sup>高原死<sup>一</sup>也。似<sup>二</sup>者般僧<sup>一</sup>、只患多<sup>レ</sup>患少。唾。更覓<sup>二</sup>一箇、如<sup>二</sup>星中月砂裏金、簸<sup>二</sup>土揚<sup>二</sup>塵

無<sub>レ</sub>処<sub>レ</sub>尋。（正統蔵二二・七〇b）

という上堂を残している。これは祖泉の訃報に接した際になされたものであるが、二月一日に祖泉が示寂したことを述べているのか、二月一日に北山景德靈隠寺から祖泉の訃報が居簡のもとに届けられたのが明確でない。ただ、状況からして祖泉は紹定二年二月に遷化し、訃報が阿育王山の師範や常州（江蘇省）顕慶寺の居簡のもとに同時期に届けられたものであろう。

さらに駒澤大学図書館所蔵『禅林諸祖弔靈語藪』卷七「挙哀」には、

為<sub>二</sub>高原和尚<sub>一</sub>。 石田薫。

来無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>従、百川曲折尽朝<sub>レ</sub>東。去無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>至、胡蝶夢中家万里。幻泡忽滅、金剛腦後抽<sub>二</sub>生鉄<sub>一</sub>。清風未<sub>レ</sub>已、鷓鴣啼在<sub>二</sub>深花裡<sub>一</sub>。高原無<sub>レ</sub>端閉<sub>レ</sub>目、昨夜帶累、南山用<sub>レ</sub>刀剷<sub>レ</sub>空。諸人若也<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>会、只得<sub>二</sub>換<sub>レ</sub>手槌<sub>レ</sub>胸。

という挙哀の法語が残されている。これは破庵派の石田法薫が亡き祖泉のためになした挙哀の拈香法語であるが、『石田和尚語録』には収められていない。法薫は如浄の後席を継いで宝慶元年に杭州銭塘県の南屏山浄慈報恩光孝禅寺の住持を勤めており、当時は西湖を挟んで靈隠寺の祖泉と対峙していたわけである。

師範の上堂や法薫の挙哀の法語によると、祖泉の遺偈は「来無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>従、去無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>至、幻泡忽滅、清風未<sub>レ</sub>已」という四言四句であったことが判明し、貴重な消息を窺い知ることができる。祖泉の遺偈を書き下せば、つぎのごとくなるう。

来たるに従う所無く、去るに至る所無し、幻泡は忽ち滅し、清風は未だ已まず。

したがって、師範も法薫も祖泉の遺偈が届けられた際、その四言四句の遺偈に対して一句ごとに著語を付しているわけである。師範の著語の部分のみを書き下せば、

南高峰と北高峰、東澗水と西澗水。烏龜が白鱉と成るを証得せば、須らく高原の元より死せざるを信ずべし。

となり、師範はこのとき明州鄞県の阿育王山弘利寺の住持であったことになる。また法薫の著語の部分のみを書き下せば、百川は曲折して尽く東に朝す、胡蝶夢中、家は万里なり。金剛腦後、生鉄を抽んじ、鷓鴣は啼いて深花裡に在り。

となろう。法薫は挙哀の拈香法語にて「南山」と自称しているから、明確に杭州の南屏山浄慈寺の住持を務めていたことが知られ、近隣の北山景德靈隠禅寺で祖泉が示寂した際、逸早く訃報が浄慈寺の法薫のもとに届けられたものであろう。

一方、大慧派の物初大観は『物初贖語』卷二四「笑翁禅師行状」において、

紹定己丑、命<sup>レ</sup>師開山。泊<sup>レ</sup>抵<sup>レ</sup>行都、有<sup>レ</sup>詔主<sup>レ</sup>靈隱。師擬<sup>レ</sup>表遜、王勉<sup>レ</sup>之曰、靈隱國利、大慈家利耳、盡先<sup>レ</sup>國而後<sup>レ</sup>家乎、奚遜為<sup>レ</sup>。居<sup>レ</sup>之三年、去<sup>レ</sup>積固之弊、興<sup>レ</sup>悠久之利。靈隱為改<sup>レ</sup>觀、始踐<sup>レ</sup>大慈開山之約。

と伝えており、同じく大慧派の無文道璨（道燦、一二二四—一二七二）も『無文印』卷四「行狀」の「育王笑翁禪師行狀」において、

三年、衛王使來、請<sup>レ</sup>開<sup>レ</sup>山大慈。至<sup>レ</sup>京師、高原泉散<sup>レ</sup>席靈隱、詔領<sup>レ</sup>住持事。靈隱雖<sup>レ</sup>擅<sup>レ</sup>山川之勝、而逼<sup>レ</sup>近屠沽、貽<sup>レ</sup>媿林壑。

と記している。このとき祖泉が靈隱寺で示寂して席を散じたことを踏まえて、

三年にして衛王、使いし来たりて、大慈に開山たらんことを請う。京師に至るに、高原泉、席を靈隱に散じ、詔ありて住持の事を領す。

と述べていることから、祖泉の示寂が紹定二年であった事実が確かめられる。祖泉が靈隱寺で示寂した際に、大慧派の笑翁妙堪が詔を受けて住持職を継承している。このとき妙堪は史彌遠（衛王）の請で明州鄞県の大慈山教忠報国禪寺（明州大慈寺）に開山として入院することになっていたが、杭州臨安府（京師）に到った際に祖泉の示寂に遭遇し、詔勅によって史家の家利（菩提寺）である大慈寺より国利である靈隱寺を優先して住持を務め、三年を経て靈隱寺を退いて明州大慈寺の開山となつたとされる。

さらに無準下の環溪惟一（一二〇二—一二八二）は『環溪和尚語録』卷下「題跋」に、

為<sup>レ</sup>龍維那<sup>一</sup>、跋<sup>レ</sup>高原和尚煨髮頌<sup>一</sup>。

珠回玉転、錯落<sup>二</sup>金盤<sup>一</sup>。高原和尚、示<sup>レ</sup>人之舍利也。龍維那、既能宝<sup>レ</sup>之。幸母<sup>下</sup>以<sup>二</sup>豌豆魚目<sup>一</sup>混<sup>レ</sup>之、乃善。（正統藏一二二・七六c—d）  
という跋文を残している。龍維那が如何なる禪者なのかは定かでないが、久しく祖泉の煨髮ないし煨髮頌を宝物として所持していたとされるから、祖泉の法嗣か剃度の小師であったものらしく、後に環溪惟一のもとを訪れて跋文を請うているわけである。惟一  
は資州（四川省）盤石県墨池の賈氏の出身であるから、祖泉や無準師範らと同じ蜀僧であり、このとき龍維那のために「高原和尚煨髮頌」に跋文を寄せている。煨髮とは剃髪した頭髪を焼くことであり、「高原和尚煨髮頌」とは祖泉が生前に詠じた偈頌で、頭髪を焼いて舍利を得た意であろう。

## 高原祖泉のことば

つぎに高原祖泉が述べた上堂語その他を整理しておきたい。はじめに『増集統伝燈録』に載る祖泉のことばを書き下してみよう。つぎのことばを挙げてみる。

高原祖泉と嘯巖文蔚——『如浄和尚語録』の跋文・校訂と越州天衣寺——（佐藤）

(1) 上堂。九祖伏陀密多尊者、八祖仏駄難提尊者に問う、「父母は我が親に非ず」という話を挙し、頌して曰く、「父母は分明に我が親に非ず、祖師の肝胆、人に向つて傾く。直下に若し能く親しく薦得せば、優曇花発す、火中の春」と。

(2) 黄漢嶺に接待を開くに贈る偈に曰く、「路は懸崖を繞る万仞頭、行人は此に到りて一場の愁いあり。暮然として箇の休歇の処を得ば、重疊の関山、脚に信せて遊ぶ」と。

このように『増集続伝燈録』には祖泉のことばとしてはわずかに一上堂と一偈頌が載せられているにすぎない。しかも上堂のほうはもともと頌古の類を上堂のかたちに改めたものであろう。また黄漢嶺については定かでないが、祖泉が住持した禅刹のいづれかに存した嶺の名称と見られる。

一方、『禅林諸祖巾靈語藪』巻一「秉炬」には「高原泉（九章）」として、祖泉が詠じた九首の秉炬法語が掲載されている。

為「照堂主」。

春山青春水碧、桃花紅李花白。転「得身」来照体立、破屋從教野火燒、横「身異類無」蹤迹<sup>一</sup>。

為「郁堂主」。

以「火把」打「円相」云、只者明珠一顆、天地豈能包裹。郁山主、一見踏「断溪橋」<sup>一</sup>。郁堂主、一得烈「破関鎖」<sup>一</sup>。雖然、摠是錯認「橘皮」作「火」。

為「慧堂主」。

仏法無「人説」、雖「慧不」能「了」。某人、還了得麼。若也了得、更無「一法過」於涅槃。脱或未「然」、且聽火焰為「汝説者」。豎「起火把」云、灼然「如光明燦爛」。

為「小師允堂主」。

堂中主護風顛、生死莫「逃」乎數、師資莫「忘」乎緣。某人、汝心允可、吾意亦然。只恐汝頑燒不「著」。蝦蟆叫在「別人田」<sup>一</sup>。

為「昇堂主」。

舉「火」云、如「日昇」東、如「二月明」夜。構「得涅槃堂中」、失「却涅槃堂下」<sup>一</sup>。雖「然如」是。擲「下火」云、更看飛星撒「火去也」。

為「熙堂主」。

炎炎酷暑、何似「春日熙熙」。者裏商量得去、猶是涅槃堂死句。如何是活句。烟滅灰飛、火裏紅蓮統「一枝」<sup>一</sup>。

為「璣堂主」。

堂中主諾、者裏領略得去、死生如<sub>二</sub>明鏡之廓然<sub>一</sub>、去住若<sub>二</sub>白璣之歷落<sub>一</sub>。二俱颺下、別有<sub>二</sub>一著<sub>一</sub>、作麼生。打<sub>二</sub>円相<sub>一</sub>云、火裏神龜空素索。

為<sub>二</sub>選塔主<sub>一</sub>。

塔中主誰委悉。眼卓朔鼻修直。相共行不<sub>二</sub>相識<sub>一</sub>、謾道今年七十七。以<sub>レ</sub>火打<sub>二</sub>円相<sub>一</sub>云、還見麼。根選<sub>二</sub>円通<sub>一</sub>為<sub>二</sub>第一<sub>一</sub>。

為<sub>二</sub>開閣主<sub>一</sub>。

樓閣門開、不<sub>レ</sub>勞<sub>二</sub>彈指<sub>一</sub>。瑞氣騰<sub>二</sub>空<sub>一</sub>、清風匝地。以<sub>レ</sub>火打<sub>二</sub>円相<sub>一</sub>云、我見<sub>二</sub>燈明仏<sub>一</sub>、本光瑞如<sub>レ</sub>此。

いづれも祖泉が諸寺院に住持していた際に示寂した堂主・小師（剃度門人）・塔主・閣主らに対して引導の秉炬をなしたものであり、貴重な祖泉のことばを伝えている。同じく『禪林諸祖弔靈語數』巻七「拳哀」には、

為<sub>二</sub>如菴和尚<sub>一</sub>。 高原泉。

大海乾枯、虚空粉碎。如菴老人、東倒西播。狸奴白牯皆驚、三世諸仏不<sub>レ</sub>會。若又於<sub>レ</sub>斯見得、大家拍<sub>レ</sub>手呵呵咲。其或未<sub>レ</sub>然、槌<sub>レ</sub>胸依<sub>レ</sub>旧哭<sub>二</sub>蒼天<sub>一</sub>。

という祖泉がなした拳哀の法語が載せられている。如庵和尚とは明州鄞県の阿育王山広利禪寺に住持した楊岐派の如庵惠崇のことであり、惠崇は別峰宝印の法を嗣いでおり、祖泉の本師退庵道奇と同門に当たるから、祖泉にとって法叔ということになる。阿育王山で惠崇が示寂した訃報を伝え受け、祖泉は法叔の惠崇のために阿育王山に到つて拳哀の法語を述べたものである。う。ちなみに惠崇の後席を継いで阿育王山に住持したのが虎丘派の晦巖大光であり、阿育王山の大光のもとには入宋した道元が参学している。惠崇が示寂したのが何時なのかは定かでないが、状況的には祖泉が越州の天台寺か台州の瑞巖寺に住持していた頃であろう。

また同じく『禪林諸祖弔靈語數』巻九「入塔」にも、つぎのような入塔法語三首が収められている。

為<sub>二</sub>高麗講主<sub>一</sub>。 高原泉（三章）

執<sub>二</sub>教一字<sub>一</sub>仏生<sub>二</sub>冤<sub>一</sub>、離<sub>レ</sub>教別求乃魔説。不<sub>レ</sub>即不<sub>レ</sub>離見得親、鍋子元来是生鉄。円寂某人、人天眼目、法門棟梁、鼓<sub>二</sub>教海之波瀾<sub>一</sub>、祭<sub>二</sub>義天之星象<sub>一</sub>。能事云華、撒<sub>レ</sub>手便行。八十年標月指、更不<sub>二</sub>重拈<sub>一</sub>、五千卷敲門瓦、一時颺下。跳出紅爐火聚、自然寔玉鏗金。正恁麼時、鈔解<sub>レ</sub>疏疏解<sub>レ</sub>経、即不<sub>レ</sub>問。且道、経解<sub>二</sub>甚処<sub>一</sub>。良久云、瑠璃殿上無<sub>二</sub>知識<sub>一</sub>、鶴唳鶯啼説最親。

為<sub>二</sub>来座主<sub>一</sub>。

従上来事、無<sub>レ</sub>不<sub>二</sub>現成<sub>一</sub>、一時毛病発、作<sub>二</sub>山前鶻噪鴉鳴<sub>一</sub>。如<sub>二</sub>山之重<sub>一</sub>、若<sub>二</sub>羽之輕<sub>一</sub>。祥風吹<sub>二</sub>塔戸<sub>一</sub>、嗅骨髄連城。

高原祖泉と嘯巖文蔚——『如浄和尚語録』の跋文・校訂と越州天台寺——（佐藤）

為「禪客」。

問在「答処、答在問処。失却話頭、以何為レ扱。遊巖叢、兮從汝棲、切忌寒猿深夜啼。

入塔の法語とは亡僧の遺骨を墓塔に納める際に唱える法語である。最初の入塔は高麗国(朝鮮半島)から到った講主のことかも知れないが、おそらく杭州錢塘県に存した恵因講寺(俗称は高麗寺)の講主が世寿八〇歳ほどで示寂した際になした入塔法語と見られる。つぎは「朶」という座主の入塔に際してなした法語であり、三番目は修行半ばで示寂した一介の禪客を入塔した際になした法語である。これらの入塔法語はおそらく祖泉が杭州錢塘県の靈隱寺の住持であったときに執り行ったものであろう。

宋代禪僧の頌古を集めた『禪宗頌古聯珠通集』の「増収」または「統収」の箇所には高原祖泉が詠じた頌古が若干ながら収められている。『禪宗頌古聯珠通集』卷六「西天初祖摩訶迦葉尊者」の項の「統収」部分には、

迦葉因阿難問、世尊伝「金襴」外、別伝「何物」。迦葉召「阿難」。難応諾。迦葉曰、倒「却門前刹竿」著。

翡翠羽毛、麒麟頭角。弟応兄呼、振「動海嶽」。路遠夜長休「把」火、倒「却門前刹竿」著。高原泉。(正統蔵一一五・三一c)

という「迦葉倒却刹竿」の古則に対する祖泉の頌古が載せられている。同じ卷六「九祖伏駄蜜多尊者」の項の「増収」部分には、九祖伏駄蜜多尊者問「八祖佛駄難提」、父母非「我親」、誰是最親者、諸仏非「我道」、誰是最道者。八祖以「傷答」。汝言与「心親」、父母非「可」比。汝行与「道合」、諸仏心即是。外求「有相仏」、与「汝不」相似。「欲」識「汝本心」、非「合亦非」難。

父母分明非「我親」、祖師肝胆向「人傾」。直下若能親薦得、優曇華発火中春。高原泉。(正統蔵一一五・三二d)

という祖泉の頌古が残されており、この頌古は『増集統伝燈録』にも所収されている。また『禪宗頌古聯珠通集』卷一五「潭州瀉山靈祐禪師」の項の「統収」部分には、

潭州瀉山靈祐禪師(嗣「百丈」)一日侍立。百丈問、誰。師曰、靈祐。丈曰、汝撥「爐中」有「火否」。師撥曰、無「火」。丈躬起深撥「得少火」、拳以示之曰、此「不」是火。師發悟礼謝。陳「其所解」。丈曰、此乃暫時岐路耳。經曰、欲「見」仏性、「当」觀「時節因縁」。時節既至、如「迷」忽悟、「如」忘「忽」憶。「方省」己物、「不」從「他」得。故祖師云、悟了同「未」悟、無「心」亦無「法」。只是無「虚妄」、凡聖等心。本来心法、元自備足。汝今既爾、善自護持。

拈「起枯柴」吹「兩吹」、応「時」星「焰」亘「天飛」。可「憐」癡坐困「爐底」、面面相看総「不」知。高原泉。(正統蔵一一五・八八d)

という百丈懷海(大智禪師、七四九—八一四)と瀉山靈祐(大円禪師、七七一—八五三)に因む「百丈撥火」の古則に対する頌古が収め



られている。『禪宗頌古聯珠通集』卷二二「台州瑞巖師彥禪師」の項には、

台州瑞巖師彥禪師（嗣巖頭）。師尋居丹丘瑞巖、坐磐石、終日如愚。每日喚主人公、復応諾。乃曰、惺惺著、他後莫受人護。

不施棒喝、喚主人公。鶩王折乳、鴨類不同。高原泉。（正統藏一一五・一九三d）

という青原下の瑞巖師彥（空照禪師）に因む「瑞巖主人公」の古則に対する頌古が残されている。師彥ゆかりの古刹である台州瑞巖寺に住持した祖泉にとって特別な思いが存する作といえよう。さらに『禪宗頌古聯珠通集』卷三五「益州青城香林院澄遠禪師」の項の「統収」部分に、

香林因僧問、如何是衲衣下事。師曰、臘月火燒山。

臘月火燒山、天寬与地寬。常啼菩薩苦、滿市鬻心肝。高原泉。（正統藏一一五・二二五b）

という雲門宗の香林澄遠（九〇八一—九八七）に因む「香林衲衣下事」に対する頌古が存している。このように『禪宗頌古聯珠通集』には数こそ少ないが、祖泉が詠じた貴重な頌古が数則収められている。

また元代に建康（南京）保寧禪寺の住持であった松源派の古林清茂（金剛幢、扶宗普覺仏性禪師、一二六一—一三三九）が統集した『宗門統要統集』卷一六「杭州龍冊寺道怱禪師（即鏡清也）」の章に、

師在雪峯因普請次、峯拳、馮山云、見色便見心、還有過也無。師云、古人為什麼事。峯云、雖然如此、我要共你商量。師云、若与麼、不如此某甲鏹地去。

〔統〕靈隱泉云、雪峯探竿在手、影草隨身。若不鏡清普請、幾乎狼籍。

という拈古が収められており、青原下の雪峰義存（真覺大師、八二二—九〇八）と法嗣の鏡清道怱（順徳大師、八六四—九三七）が普請作務に因んでなした問答に対して靈隱□泉という禪者が古則の拈評をなしている。この靈隱泉とは靈隱寺に住持した祖泉のことを指していると思われる。

さらに日本の南北朝期に夢窓派の義堂周信（空華道人、一二三二—一三三八）が編集した『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』卷上「知事」に「高原泉（宋人嗣退菴）」の作として、

謝監収。高原泉（宋人嗣退菴）。

定起横身報不平、幸逢南畝已西成。刈禾鎌子如能用、何必吹毛耀七星。（日仏全八八・三〇c）

高原祖泉と嘯巖文蔚——『如浄和尚語録』の跋文・校訂と越州天衣寺——（佐藤）

という偈頌が載せられており、これは同じ義堂周信編集『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』巻五「知事」にも「謝」監取。高原泉〔正統藏八八・一四二a〕として載せられている。

### 嘯巖文蔚の法諱と道号

高原祖泉に関して一通り考察を試みたことから、つぎに嘯巖文蔚についても事跡を整理しておきたい。この人は郷閩や俗姓については一切知られていない。法諱を文蔚といい、道号を嘯巖と称している。嘯巖とは獅子や虎あるいは狼などが遠吠えしている巖石のことであり、巖盤上で獅子吼するさまを踏まえている。また文蔚の「蔚」とは草木が盛んに茂るさまをいうから、嘯巖と蔚で草木に覆われた巖盤ということになろう。

蔚の語を法諱の下字に用いた禪者としては、文蔚のほかは元末明初に活躍した破庵派(幻住派祖)の中峰明本(幻住老人、普応国師、一二六三—一三三三)の法孫に当たる萬峰時蔚(一三〇三—一三八二)が存している。一方、文蔚と同じ南宋中期に嘯巖の道号を用いた天台宗の教僧に嘯巖文虎がおり、この人の道号と法諱はまさに虎が吼える「虎嘯」の語に由来している。文虎は台州(浙江省)天台県の県城中の東掖山白蓮寺(白蓮道場)に化導を敷き、門下に頑空智覚(真悟大師)を輩出している。物初大観の『物初臚語』巻二三「頑空法師塔銘」に頑空智覚の伝記が存し、智覚が東掖山の文虎のもとでなした事跡が記されている。文虎に關しても文蔚と同じように事跡が定かでないが、ほぼ時期を同じくして「嘯巖」の道号を持つ禅僧文蔚と教僧文虎が並立していたことには興味深いものがある。(28)

### 嘯巖文蔚の参学と嗣法

すでに触れたごとく嘯巖文蔚が法を嗣いだ本師は楊岐派の退庵道奇であるが、その前後に文蔚が虎丘派(松源派祖)の松源崇嶽に参学していた消息が伝えられている。『松源和尚語録』巻下「賛仏祖」に、

文蔚侍者請<sub>レ</sub>賛。

心龜胆大、少<sub>レ</sub>実多<sub>レ</sub>虚。瞎<sub>二</sub>衲僧眼<sub>一</sub>、断<sub>二</sub>肘後符<sub>一</sub>。臨<sub>二</sub>濟東山之道<sub>一</sub>、命<sub>二</sub>若<sub>二</sub>懸絲<sub>一</sub>。念<sub>二</sub>念刀耕<sub>二</sub>火種<sub>一</sub>、老<sub>二</sub>此殘軀<sub>一</sub>、寥<sub>二</sub>落林泉意<sub>一</sub>自殊。(正統藏一二一・三二二c)

という頂相自贊のことは残されている。文蔚は松源崇嶽の法嗣たちと同世代に当たることから、ここにいう文蔚侍者というのが文蔚のことと見られ、文蔚は晩年に近い頃の崇嶽のもとで侍者を務めた経験が存したことが知られる。このとき文蔚は崇嶽に参学して頂相に贊を得ているわけであり、崇嶽から深く信認を得ていたことなるう。一方、如浄もこの頃に崇嶽に参学しており、『松源和尚語録』巻下「偈頌」には「示「如浄禪人」」（正統藏二二一・三二四）と題した偈頌が載せられている。この間、如浄と文蔚の両者が同じ崇嶽の会下で道交を深める機会は十分に存したものと推測される。

文蔚がどのような参学過程を過ごしたか順序などは定かでないが、おそらく崇嶽に参学した後に達観のもとに投じたものではなからうか。「天童山息菴禪師塔銘」には文蔚のことが何も記されていないことから、塔銘が著された当時においては、独山従礼らに比べて達観の門人の中で文蔚はまだ注目されるような存在になつていなかったのかも知れない。

## 天衣寺と文蔚の活動

すでに触れたごとく『増集統伝燈録』をはじめとする禅宗燈史や日本で編纂された宗派図などでは、いずれも文蔚の肩書きを天衣寺の住持として伝えており、天衣寺のほかに文蔚が住持した禅刹の名は伝えられていない。しかも『如浄和尚語録』に載る文蔚の跋文も天衣寺住持として書されたものである。おそらく日本の道元のもとに届けられた宋版『如浄和尚語録』には実際に文蔚が揮毫した筆跡をそのまま版木に起こしていたはずであり、落款なども押されていたことであろう。

ちなみに『枯崖和尚漫録』巻中「慶元府小靈隱栢巖凝禪師」の項に、

慶元府小靈隱栢巖凝禪師、性簡允無所交接。乃息庵法嗣。住「金文」日、提綱云、尽大地是箇住処、不用「強安排」。尽大地是箇当人、何須「求」影迹。東边住喚作「東边長老」、西边住喚作「西边長老」。翻來覆去、横倒豎直。一月之間、做「出」許多不唧囉。雖然、你要「見」凝上座、又却在「那」边「更」那边。你不要「見」、又却在「你」諸人眉毛眼睫上、如「是」而住、如「是」而說。一箇舌頭、分作「兩」橛。且道、那箇舌頭。顧「左」右「云」、了。大抵步驟熟、如「籊」雲汗血、無「蹇」態也。（正統藏一四八・八一 a）

とあり、文蔚と同門に当たる栢巖□凝が息庵達観の法を嗣いだ後、明州（慶元府）鄞県の金文山慧照寺（小靈隱）に住持して行なった「提綱」のことは載せている。栢巖□凝は「性は簡允にして交接する所無し」とあるから、自尊心に満ち他者とむやみに和合することが少なかったとされる。同じく達観に学んだ同学の文蔚にも他とむやみに妥協しない気品に満ちた一面が存したのかも知

れない。

### 嘯巖文蔚のつぎ

いま一つ特筆すべきは無準師範が『仏鑑禪師語録』巻五「序跋」に、

跋嘯巖語録。

嘯巖 嘯、豈止聞四十里。直得、三千刹土、悉皆震驚、猛獸竄伏、飛禽墜落。非雷霆之所擬。今既滅矣、餘音尚存、殷殷餘韻、殆不可掩。眼裏聞<sub>レ</sub>声者、当<sub>二</sub>自甄別<sub>一</sub>。(正統蔵一・二一・四七九d~四八〇a)

という跋文を残していることであろう。これによれば、文蔚には生前のことをまとめた『嘯巖和尚語録』という語録が編纂されたことが知られ、文蔚が示寂して後にその門人から依頼を受けてか師範は跋文を寄せている。「嘯巖語録に跋す」の内容を書き下すならば、つぎのようになろう。

嘯巖の一嘯、豈に止だ四十里に聞こゆるのみならんや。直に得たり、三千刹土、悉く皆な震驚し、猛獸は竄伏し、飛禽は墜落することを。雷霆の擬する所に非ず。今既に滅せるも、餘音は尚お存し、殷殷餘韻として、殆んど掩うべからず。眼裏に声を聞く者、当に自ら甄別すべし。

師範は文蔚のことを獅子吼の一嘯に準えており、文蔚が示寂した後もその余韻が広く諸方に鳴り響いていることを百獸の王の遠吠えや轟く雷鳴に比している。『嘯巖和尚語録』が現今に残されていたならば、師範が跋文を寄せた年月日のほか、文蔚と如浄の関わり合い、文蔚の詳細なことばや事蹟はもちろんのこと、文蔚の交友関係なども克明に判明したことであろう。あるいは『嘯巖和尚語録』末尾に「嘯巖和尚行状」か「嘯巖和尚塔銘」といった伝記史料が付されていた可能性も存しよう。

『枯崖和尚漫録』巻下「嘯巖禪師示衆」の項に、つぎのような文蔚の説示が収められている。

嘯巖禪師示衆云、一年三百六十日、今朝恰是結交時。且道、天衣將<sub>レ</sub>甚与<sub>レ</sub>人分歲。拈<sub>二</sub>拄杖<sub>一</sub>云、一不<sub>レ</sub>做、二不<sub>レ</sub>休、爛<sub>二</sub>烹<sub>一</sub>石虎、活<sub>二</sub>剥<sub>一</sub>泥牛。已是滿盤釘出了也。卓<sub>二</sub>拄杖<sub>一</sub>云、三德六味、施<sub>レ</sub>仏及僧、法界有情、普同<sub>二</sub>供養<sub>一</sub>。若是粘<sub>レ</sub>牙帶<sub>レ</sub>齒漢、応<sub>レ</sub>笑<sub>二</sub>家風冷淡<sub>一</sub>。一咬見<sub>レ</sub>骨底、自然樂以忘<sub>レ</sub>憂。雖<sub>二</sub>然如<sub>レ</sub>是<sub>一</sub>、明年更有<sub>二</sub>新條<sub>一</sub>在、惱<sub>二</sub>乱春風<sub>一</sub>。卒未<sub>レ</sub>休。嘯巖語言、如<sub>レ</sub>替康長七尺八寸、美<sub>二</sub>音氣<sub>一</sub>好<sub>中</sub>容色<sub>上</sub>、土<sub>二</sub>木形骸<sub>一</sub>不<sub>二</sub>

自藻飾。人以爲<sub>二</sub>龍章鳳姿天質自然<sub>一</sub>也。烏摩可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>敬哉。(正統蔵一四八・八八b)

これは文蔚が越州天衣寺でなした示衆のことばとその評価であって、書き下してみるならば、つぎのごとくならう。

嘯巖禪師、衆に示して云く、「二年三百六十日、今朝は恰も是れ結交の時なり。且らく道え、天衣は甚を將てか人と分歳せん」と。拄杖を拈じて云く、「一も做さずば、二も休せず、石虎を爛烹し、泥牛を活剥す。已是に盤に満ちて釘出し了りわれり」と。拄杖を卓して云く、「三徳六味をば、仏及び僧に施し、法界の有情、普く供養を同じくす。若し是れ牙に粘し齒に帯る漢ならば、応に家風の冷淡なるを笑うべし。一咬にて骨を見る底、自然に樂しみて以て憂いを忘れん。是の如しと雖然も、明年更に新條有らん、春風を悩乱して卒に未だ休せず」と。

嘯巖の語言は、嵇康が長は七尺八寸にして、音氣を美め容色を好むが如し。形骸を土木し、自ら藻飾せず、人以て龍章鳳姿、天質自然なりと爲す。烏摩、敬わざるべけんや。

文蔚が「天衣」と自称していることから、天衣寺で行なった示衆であつたことがわかる。「三徳六味、施仏及僧、法界有情、普同供養」とは禪宗の清規に載る「施食偈文」の引用である。枯崖円悟は文蔚のことを敬つて竹林の七賢のひとり嵇康（字は叔夜、二三―二六〇）に準えているが、嵇康には文集に『嵇中散集』が存している。枯崖円悟は文蔚が清貧な禪風を振るつて飾らない性格であつたことを称えている。

一方、『増集続伝燈録』に載る文蔚の上堂を書き下すと、つぎのようにならう。

上堂に、雲門和尚、衆に示して云く、「人人尽く光明有り、看る時は見えす、暗昏昏たり、作麼生か是れ諸人が自己の光明」と。自ら代わりて云く、「厨庫山門」と。又た云く、「好事は無きに如かず」と。師頌して曰く、「人人尽く光明有り、看る時は見えす暗昏昏たり。山門と厨庫とを踢倒せば、此の時、明暗は自然に分かたん」と。

これは雲門宗祖の雲門文偃（匡真大師、八六四―九四九）の「雲門厨庫山門」の古則を取り上げて頌古を詠じたものであり、実際には上堂ではなく頌古として載せるべきものであらう。

また『禪宗頌古聯珠通集』には文蔚が詠じた貴重な頌古二作が収められている。『禪宗頌古聯珠通集』卷一六「宣州刺史陸巨大夫」の項の「続収」部分には、

陸大夫問「南泉」曰、肇法師也甚奇怪、解道「天地同根万物一体」。泉指「庭前牡丹」曰、大夫、時人見「此一枝花」、如「夢相似」。

天地同根元「一体」、画師難「画亦難」描。南泉転「步移」身処、引「得黄鸝下」柳條。嘯巖蔚。（『増集続伝燈録』一五、九九d）

という南泉普願（王老師、七四八―八三四）と宣州刺史陸巨に因む「南泉牡丹」に対する頌古が存している。同じく『禪宗頌古聯珠通集』卷三二「韶州雲門文偃禪師」の項の「続収」部分にも、

高原祖泉と嘯巖文蔚——「如浄和尚語録」の跋文・校訂と越州天衣寺——（佐藤）

韶州雲門文偃禪師(嗣雪峯)示衆曰、人人自有光明在、看時不見暗昏昏。作麼生是諸人自己光明。自代云、厨庫三門。又云、好事不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>無。

人人尽有光明在、看時不見暗昏昏、踢倒山門与厨庫、此時明暗自然分。 蔚嘯巖。(正統藏一一五・二〇四a)

という雲門文偃に因む「雲門厨庫三門」に対する頌古が載せられており、これは先のごとく『増集続伝燈録』に載る「雲門厨庫山門」に因む示衆と同じである。

こうした「枯崖和尚漫録」に載る「嘯巖蔚禪師示衆」や「禪宗頌古聯珠通集」に載る嘯巖蔚(または蔚嘯巖)が詠じた頌古は『嘯巖和尚語録』から抜粋されたものと見られ、枯崖円悟も実際に『嘯巖和尚語録』を閲覧し、そこから文蔚の代表的なことを採録しているものであろう。

### 嘯巖文蔚が『如浄和尚語録』に跋文を寄せる

つぎに高原祖泉と嘯巖文蔚が『如浄和尚語録』に跋文を寄せていることについて別個に考察をなしておきたい。はじめに跋文を寄せたのは文蔚であり、『如浄和尚語録』巻頭(二に末尾)には、

獅子吼無畏説、百獸聞之皆腦裂。天衣拳似箇中人、邁古超今離途轍。

紹定戊子中秋、天衣住山比丘文蔚謹跋。(大正藏四八・一三三a)

獅子吼無畏の説、百獸、之れを聞いて皆な腦裂す。天衣、拳似す、箇中の人。古を邁ぎ今を超えて途轍を離る。

紹定戊子の中秋、天衣住山比丘の文蔚、謹んで跋す。

という天衣寺の文蔚が紹定元年(一二三二)八月十五日(中秋)に撰した跋文が載せられている。ときあたかも如浄が宝慶三年(一二二七)七月十七日に六六歳で示寂して一年あまりが過ぎており、跋文の依頼者は最初に天衣寺の文蔚のもとを訪ねていることが知られる。文蔚自身が「謹んで跋す」と書き記していることから、文蔚が寄せたのは明確に跋文であったことが知られる。おそらく如浄の門人たちはこの間に『如浄和尚語録』の刊行に向けて編集作業を進めていたものと見られ、如浄の小祥忌(二周忌)の法要を務めた後、如浄門下の禪者のひとり語録の写本を携えて越州天衣寺の住持であった文蔚のもとを訪れて語録に跋文を依頼していることになろう。



このとき『如浄和尚語録』の素本を手天衣寺に赴いた如浄門下の禪者が誰であったのかは定かでないが、その人物は亡き如浄の意向を受けてか、あるいは如浄ゆかりの禪利であることを踏まえて、天衣寺の文蔚に跋文を求めたものと見られる。なぜ五山十刹でもない越州天衣寺の住持文蔚をその対象としたのかはこれまで定かでなかったが、すでに触れたごとく天衣寺が如浄の出生にまつわる有縁の寺院であったという背景を踏まえて、如浄会下の門人たちが天衣寺の文蔚こそ適任であると解したのであれば、もっとも納得がいく説となろう。

文蔚の跋文はわずかに四句の偈頌のかたちを取っており、最初に六祖下の永嘉玄覺（真覺大師、無相大師、？―七二三）の『証道歌』に「師子吼無畏説、百獸聞之皆腦裂」（大正藏五一・四六〇b）とある語句を挙げ、さらに「天衣、拳似す、箇中の人。古を邁ぎ今を超えて途轍を離る」と述べて箇中の人である如浄が示すことばの奥深さを称えている。文蔚としては如浄が真に仏法を体現し、古今を超越し規格を絶したすぐれた禪匠であると称え、その語録を推奨しているわけである。<sup>(4)</sup>

ちなみに『如浄和尚語録』「臨安府浄慈禪寺語」には「清禪師帰水庵塔上堂」（大正藏四八・一二四b）が存するが、清禪師とは楊岐派の水庵師一（一一〇七―一一七六）の法を嗣いだ簡庵嗣清のことであろう。嗣清は息庵達観と同門に当たることから、文蔚にとって法叔ということになる。<sup>(4)</sup>

### 高原祖泉が『如浄和尚語録』に跋文を寄せる

高原祖泉が杭州靈隱寺に住持していた時期になした事跡として最も特筆すべきは、如浄の語録である『如浄和尚語録』に跋文を寄せ、しかもその『如浄和尚語録』全体の校勘をなしている事実であろう。『如浄和尚語録』の末尾（一に冒頭）には、

浄禪師得無師句、用逸格機。婁至徳已前、青葉髻之後、突出無面目底。慥暴生癡、通身是眼、要<sub>レ</sub>看<sub>レ</sub>是録、予保、渠未<sub>レ</sub>夢見<sub>レ</sub>此老脚跟下汗臭氣<sub>一</sub>在。

紹定改元開爐日、靈隱高原祖泉敬跋。（大正藏四八・一三三a）

浄禪師、無師の句を得て、逸格の機を用ゆ。婁至徳已前、青葉髻の後、無面目底を突出す。慥暴生癡にして、通身是れ眼となりて、是の録を看んと要するも、予保せん、渠は未だ夢にも此の老の脚跟下の汗臭気を見ざることを。

紹定改元の開爐日、靈隱の高原祖泉、敬んで跋す。

とあり、紹定元年(一二三二)一〇月一日の開爐日に祖泉は靈隱寺の住持として跋文を寄せている。先のごとく越州紹興府山陰県の法華山天衣寺にて嘯巖文蔚が『如浄和尚語録』に跋文を寄せてより一ヶ月半後のことである。おそらく同一人物が越州天衣寺を訪れて文蔚から跋文を得た後、時を経ず杭州靈隱寺へと赴いて祖泉にも同じく跋文を依頼したものであろう。

如浄が示寂してまもない紹定元年の頃、禪宗五山に住持を務めていた禪者としては、靈隱寺の祖泉のほか、杭州餘杭県の径山興聖万寿寺(五山第一位)では大慧派の浙翁如琰(仏心禪師、一一五一—一二三五)の後を受けて同門の少林妙崧(仏行禪師、?—一二三三)が住持している。明州鄞県の天童山景德寺(五山第三位)では如浄の後席を継いだ虎丘派の枯禪自鏡(?—一二三八)が示寂し、虎丘派の晦巖大光が新たに住持として入院した直後に当たっている。また杭州錢塘県の南屏山浄慈報恩光孝寺(五山第四位)では如浄の後席を継いだ破庵派の石田法薰(一一七一—一二四五)がなお住持を継続している。明州鄞県の阿育王山広利寺(五山第五位)では「前住天童浄和尚遺書至上堂」を行なった破庵派の無準師範(仏鑑禪師、一一七七一—一二四九)がまだ住持を務めている。

そんな中で靈隱寺の祖泉が『如浄和尚語録』に跋文を寄せることになった理由としては、祖泉が当代を代表する禪匠であった点が第一であろう。石田法薰や無準師範は同じ蜀僧として祖泉に敬意を払っている。加えて靈隱寺のある杭州錢塘島の地が宋版を開版するのに最も適した地であった点も大きいであろう。如浄が生前に祖泉とどのくらい親しい道交をなしていたのかは定かでないが、すでに触れたごとく祖泉もまた越州天衣寺に住持した経緯が存している。天衣寺と如浄の因縁を踏まえて如浄門下の人々は祖泉こそ如浄の語録に跋文を寄せるに相応しい禪匠として白羽の矢を当てたものであろう。そのため祖泉は如浄の門人から跋文の依頼を受けた際に、おそらく快くこれを受諾したことであろう。

このとき祖泉は如浄が生前に自ら嗣承香を焚かず、逸群のはたらきをなした事跡を踏まえてか「無師の句を得、逸格の機を用ゆ」と評している。「無師の句」とは如浄が生前に嗣承香を焚かず、独特の禅機を振るったことを言い、涅槃堂で初めて本師足庵智鑑に對して拈香して師恩に酬いた因縁を踏まえた表現であろう。「婁至徳已前」とは婁至徳如来の出世する以前のことであり、婁至徳如来とは現在賢劫中の千仏の中で最後の仏をいう。また「青葉髻之後」とは青葉髻王如来が出世して以降のことであり、青葉髻王如来とは未来仏の名であり、『大乘悲分陀利經』卷四「千童子受記品」(大正藏三・二六二a—二六四a)に婁至徳如来とともにその名が見える。かつて祖泉に参学した破庵派の西巖了慧は『西巖和尚語録』卷上「瑞巖山開善禪寺語録」の「元宵上堂」にて、

元宵上堂、謝都寺齋。人間共賞三元宵、瑞巖本光現瑞。屋上山橋下水、三門八字打開。左右青葉婁至、頭頂天脚踏地。陳如觀破香積厨、

釈迦不受<sup>レ</sup>然燈記。(中統蔵一・二二・一七七b-c)

と述べており、三門(山門)の左右にとつかりと付む金剛力士像を青葉髻王如来と婁至徳如来の化身として取り上げている<sup>(9)</sup>。また祖泉は「慥暴生瘳」の語を用いているが、これは勇猛果敢な意であり、後に如浄門下の無外義遠(?—一二六六)も『永平元禪師語録』の序文にこの語を寄せている<sup>(10)</sup>。

### 祖泉が『如浄和尚語録』を校勘する

跋文を揮毫した後、祖泉はさらに『如浄和尚語録』を全体にわたって校勘している。校勘とは校訂ともいい、刊行出版する典籍を全体的に閲覧し、文字の移動や体裁などを調えることであり、禅籍の出版に際しては著名な禅僧から閲覧校合を行なってもらうことが通例となっていた。如浄門下の人々は靈隠寺の祖泉に跋文を依頼するとともに、さらに祖泉に語録全体の校訂をも依頼したわけである。『如浄和尚語録』の巻末に、

歳次己丑六月初伏日、小師広宗募刻<sup>レ</sup>板。臨安府靈隠景德禪寺祖泉校勘焉。(大正蔵四八・一三三a)

という刊記のことが載せられている。紹定二年(一二三二)初伏日すなわち六月、夏至の後の第三庚の日に、如浄の小師であった広宗が勸募して版を刻んだことを述べている。小師とは剃度の弟子のことであり、広宗は如浄のもとで剃髪得度した子飼いの門人であったらしいが、その事跡は全く不明である。募刻とは広く人々から浄財を募って出版刊行に漕ぎ着けることであり、募刊あるいは捐刊ともいう<sup>(11)</sup>。

それより先、祖泉が靈隠寺の住持として『如浄和尚語録』を校勘している事実が知られるわけである。おそらく状況的に祖泉が『如浄和尚語録』を校勘したのは紹定元年一〇月に跋文を寄せてから紹定二年の年頭頃までの間に限られるものと見られる。しかも祖泉は『如浄和尚語録』が刊行されるのを目前に、その完成を見ることなく残念ながら遷化のときを迎えている。そのため祖泉が生涯で最後に記した文章が『如浄和尚語録』の跋文であり、最後になした業績が『如浄和尚語録』の校勘であったことになろう。

『如浄和尚語録』に跋文を寄せ、字句の校勘までなしたことで、高原祖泉という禅僧の名は中国・日本の禅宗史上にしっかりと名を留めることができたといえる。残念ながら、祖泉が如浄その人とのような接点があったのかについては明確でないが、修行時代や住持期に何らかの接点があったものであろうか。如浄出生にまつわる越州天衣寺の存在が『如浄和尚語録』の編集・刊行

にも大きく関与していたものと解しておきたい。

おわりに

以上、考察してきたごとく楊岐派の高原祖泉は如浄が示寂した南宋中期の頃、第一等の宗師として知られていた。同世代の癡絶道冲や無準師範は祖泉と同じく四川出身の蜀僧であったが、祖泉より長命を保って活躍している。祖泉は五山第二位の杭州靈隱寺の住持として『如浄和尚語録』に跋文を寄せるとともに、語録の校勘をなしたものの、その直後に遷化している。世寿は定かでないが、六〇歳前後ではなかったかと推測される。いま暫く存命であれば、さらに化導の場を広げて活躍したことであろう。

一方の嘯巖文蔚は詳しい足跡が定かでないが、如浄が示寂した頃に越州天衣寺の住持を務めていたがために、『如浄和尚語録』に跋文を寄せる好因縁に恵まれた。文蔚には『嘯巖和尚語録』が編纂されたことが知られるが、この語録が後世に残されていたならば、文蔚の足跡はもちろん、天衣寺のことや如浄との関わりなども詳しく辿れたかも知れない。

平成一四年(二〇〇二)六月に刊行された『永平寺史料全書・禅籍編』第一巻に「如浄和尚語録断簡」(九〇一頁～九二六頁)が収められており、これが渡来僧寂円によって書写されたことが判明した。断簡の末尾には高原祖泉の跋文も書き写されており、これを筆写体のまま返り点などを付せずに表示するならば、つぎのようである。

浄禪師得無師句、用逸格機。婁至德己前、青葉誓之後、突出無面目底。慥暴生癡、通身是眼、要看是録、予保、渠未夢見此老脚跟下汗臭氣在。  
紹定改元開炉日、靈隱高原祖泉敬跋。

印文「高原」 印文「祖泉」

朱印文「寂圓」

毛筆体で丁寧な浄書されており、しかも印文「高原」「祖泉」の落款を形に沿って書写した後に、さらに行を改めて尾丁に朱印文「寂円」(正確には「寂圓」とある)と刻まれた落款が押されている。<sup>54)</sup> 大本山永平寺様の御許可を得て、その影印を本論文の末尾に載せておいたので参照されたい。

日本に渡来する直前、寂円は南宋禅林の趨勢を直に知っており、それらをあえて振り切つて紹定元年(日本の安貞二年、一二二八)に二二歳の若さで日本へと向かい、道元のもとで修行する道を選んでいく。<sup>55)</sup> 当時の南宋五山に如何なる禪者が化導を敷いていたの

かを寂円はよく認識していたものと見られる。当然、紹定元年の当時、靈隱寺の現住持を務めて評価の高かった祖泉のことは遠く伝え聞いていたはずであり、如浄門下の人々が祖泉に跋文を依頼する意向であることも知っていたかも知れない。

仁治三年（南宋の淳祐二年、一二四二）八月に宋版『如浄和尚語録』が南宋から遠く日本の道元のもとに齎されたとき、寂円は道元に懇願してこれを率先して浄書したものであろう。寂円は洛南（京都市）深草の観音導利院興聖玉林寺や越前（福井県）志比荘の吉祥山永平寺において如浄を祀る承陽庵の塔主（守塔比丘）の要職を務めていたとされる。寂円は宋版『如浄和尚語録』を永平寺で浄書したのであり、宋版刊本とは別に浄書写本として一冊を残したわけである。浄書写本の全体は残されていないものの、断簡が辛うじて現存に伝えられている。宋版『如浄和尚語録』自体も現存に残されていないが、寂円が真摯に書写してくれたことで、永平寺所蔵『如浄和尚語録』断簡写本は宋版の雰囲気のままに伝えてくれている。しかも高原祖泉の跋文の部分が幸いにもその中に残されていることで、祖泉の思いが八世紀もの歳月を越えて直に迫ってくる感を禁じ得ない。

## 【註】

(1) 瑞長本『建誓記』の「仁治三年」の項に、

同年八月初五日、天童浄和尚語録初テ到ル。同六日、上堂アリテ  
大衆ト俱ニ三拝。遂ニ立起シテ捧<sub>レ</sub>語録<sub>ニ</sub>、薰香而頂戴スト云々。下

座、与<sub>レ</sub>大衆ニ三拝ス。(吉田道興・道元伝記史料集成、一〇五頁)

とあり、『天童浄和尚語録』が到来した際の状況を『道元和尚広録』  
巻一の「天童和尚語録到上堂」を踏まえてまとめている。

(2) 同じ面山瑞方による『天童如浄禪師行録開解』では、出生年時に  
関する由来する史料などは何も記されていない。また山神のことに  
関して「其ノ母ノ夢ノ事ハ伝弘録ニ出ズ」(続曹全注解三・一九一b)  
と記しているが、瑩山紹瑾の『伝光録』「第五十祖天童浄和尚」の章  
に母の夢のことは何も記載が存しない。

(3) 洪咨夔（字は舜俞、号は平斎、一二七六—一二三六）の『平斎文集』

卷三一「墓誌」に載る「仏心禪師塔銘」によれば「師寧海国氏子。  
母夢<sub>ニ</sub>神人遣<sub>ニ</sub>大珠<sub>ニ</sub>而娠、生有<sub>ニ</sub>光瑞<sub>ニ</sub>」とあり、如浄と親しい大慧  
派の浙翁如琰（仏心禪師、一一五一—一二二五）の場合も、神人が  
大株を残す夢を見て母親が如琰を身籠もったと伝えている。

(4) 『歴朝法華持驗紀』巻上「晋釈曇翼」の項に、

晋釈曇翼、餘杭人。初沙門法志、常誦<sub>ニ</sub>法華<sub>ニ</sub>、有<sub>ニ</sub>雉翔<sub>ニ</sub>集<sub>ニ</sub>座隅<sub>ニ</sub>、  
如<sub>ニ</sub>聽<sub>レ</sub>経状<sub>ニ</sub>。七年雉殞、志瘞<sub>レ</sub>之。夜夢<sub>ニ</sub>童子拜曰、因<sub>ニ</sub>聽<sub>レ</sub>経  
得<sub>レ</sub>脱<sub>ニ</sub>羽類<sub>ニ</sub>、今生<sub>ニ</sub>山前王氏家<sub>ニ</sub>矣。王氏一日設<sub>レ</sub>齋、志乃踵<sub>レ</sub>門。  
見曰、我和上来也。志撫<sub>レ</sub>之曰、此我雉兒也。解<sub>レ</sub>衣視<sub>ニ</sub>腋下<sub>ニ</sub>、果  
有<sub>ニ</sub>雉毛<sub>ニ</sub>三莖<sub>ニ</sub>、因名<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>翼。七歲出家、十六雉髮、初入<sub>ニ</sub>廬山<sub>ニ</sub>依<sub>ニ</sub>

遠公。繼往三閩中、師二羅什。義熙十三年、東還二会稽、入二秦望山、結二茆菴、稱二法華精舍、專誦二法華。越十二年、有二女子披二彩服、携レ籠盤二。一白豕大蒜阿荖、至二師前、曰、妾入レ山采薇、日夕矣。豺狼縱橫、婦二無生理、敢託二一宿。師却レ之甚力、女哀鳴不レ已。遂令レ居二草床上、夜半号二呼腹疼、求二師按摩。師以レ布裹二錫杖、遙為按レ之。翌日、女以二彩服、化二祥雲、豕變二白象、蒜化二双蓮、凌二空而上。謂レ師曰、我普賢菩薩也、以レ汝不レ久當二歸我衆、特來相試。觀レ汝心、真如二水中月、不レ可二染汚二也。既而天為二雨華、地皆震動。太守孟覲方晨起視事、忽見二南方祥雲、光射二庭際、知二普賢示化。遂以聞レ於朝、敕建二法華寺。即今天衣寺也。師既化、漆二其身二留二山中。(正統藏一三四・四五二c) d)

とあり、曇翼の出生因縁と出家修道、法華精舎の結庵、曇翼と普賢菩薩(化身女子)とのやり取り、法華寺(後に法華山天衣寺と改称)の建立などについて記されている。

(5) 『増集統伝燈録』のほかに高原祖泉の章を立伝している禅宗燈史としては、『五燈全書』卷五三「杭州靈隱高原祖泉禪師」の章(正統藏一四一・八一b)と、『統指月録』卷三「臨安靈隱高原祖泉禪師」の章(正統藏一四三・四一五c) d)と、『統燈正統』卷七「杭州府靈隱高原祖泉禪師」の章(正統藏一四四・二八八d) (二八九a)と、『統燈存稿』卷二「杭州靈隱高原祖泉禪師」の章(正統藏一四五・二九d) (三〇a)が存している。しかし、いずれも拈古・頌古・偈頌の類いを載せるのみで、伝記的な記事は見られない。

(6) 『増集統伝燈録』卷一「四明天童息庵達観禪師」の章(正統藏一四二・三八二a)では、簡略な伝記と一上堂(頌古か)を載せるのである。また「天童山息菴禪師塔銘」のほかに息庵達観の名を載せる史料として、『虚堂和尚語録』卷四「靈隱立僧普説」に「木庵永和尚住二鼓山、道行二江浙、衲子奔趨。以致二松源・秀崑・息庵・無用諸大老、皆入レ閩觀二其作略一」(大正藏四七・一〇一六c)という記事が存し、『禅林備用清規』卷四「西堂頭首受レ請陞座」に「簡堂受レ請、石橋引座、淳庵受レ請、息庵引座、皆拳レ話」(正統藏一一・四四c)として名が見られる。また『淮海外集』卷下「祭二西江禪師一文」に名が存し、『物初贖語』では卷二「西江」と卷二四の「北磻禪師行状」「大川禪師行状」「笑翁禪師行状」にそれぞれ名が存し、『無文印』では卷四の「育王笑翁禪師行状」と「徑山無準禪師行状」に名が存し、『月磻別業』卷六「詩」にも「□古山先世存齋・息菴・東澗三老帖」が存する。

(7) 『増集統伝燈録』のほかに嘯巖文蔚の章を立伝している禅宗燈史としては、『五燈全書』卷五三「越州天衣嘯巖文蔚禪師」の章(正統藏一四一・八〇d)と、『統指月録』卷三「越州天衣嘯巖文蔚禪師」の章(正統藏一四三・四一五b)と、『統燈正統』卷七「紹興府天衣嘯巖文蔚禪師」の章(正統藏一四四・二八八c)と、『統燈存稿』卷二「越州天衣嘯巖文蔚禪師」の章(正統藏一四五・二九c)などが存している。しかし、いずれも上堂(頌古)の類いを載せるのみで、伝記的な記事は見られない。



(8) 蜀地(四川省)の禪者に關してまとめた禪宗燈史として臨濟正宗の丈雪通醉(一六一〇—一六九三)が編輯した『錦江禪燈』二〇卷(正統藏一四五冊に所収)が存しているが、そこに祖泉の伝記は取められていない。近くは一九九二年六月に出版された四川省仏教協會編『巴蜀禪燈録』(成都出版社、一九九二年六月)が存し、そこには「枯崖和尚漫録」からの引用として「高原祖泉(南宋人)」(二七七頁—二七八頁)の記事が載せられている。

(9) 道者とは道人と同じく仏道修行を行なう者のことであり、修行者のことを指しているが、さらに進んで自由闊達な達道者といった意味合いを含んでいる。北宋代には雲門宗の開先善暹のことを海上横行道者と称し、同じく雲門宗の投子法宗のことを宗道者と称している。また楊岐派の開福道寧(一一一三)を寧道者と称しており、南宋代には道寧の遠孫に当たる無門慧開(仏眼禪師、一一八三—一二六〇)を開道者と称している。

(10) 『景德伝燈録』卷五「吉州青原山行思禪師」の章に、青原行思が法嗣の石頭希遷を認めたことばとして「衆角雖多一麟足矣」(大正藏五一・二四〇b)とある。

(11) 『破菴和尚語録』卷末に付される宗性が編した「行狀」に、  
留三年出峽、至常州華藏、遷菴演始延<sub>二</sub>師分座立僧、衆皆傾服。  
至<sub>三</sub>於金山退菴奇・靈隱笑菴悟・徑山蒙菴聡、師至必延居<sub>二</sub>第一座、  
衆輒倍<sub>レ</sub>常。(正統藏一一一・四二六c)

とあり、破庵祖先が常州(江蘇省)無錫県の褒忠顯報華藏禪寺(華

藏寺)に到つて大慧派の遷庵宗演のもとで首座として分座立僧してより、鎮江府金山の退庵道奇と杭州靈隱寺の笑庵了悟と杭州徑山の蒙庵元聡のもとでもそれぞれ首座に拝請されている。

(12) 『仏鑑禪師語録』卷末の無文道璨撰「徑山無準禪師行狀」に、  
六年秋、次<sub>二</sub>荊南玉泉寺、有<sub>二</sub>言老宿者、嘗參<sub>二</sub>大慧、覺老宿見<sub>二</sub>璉窮谷。師周<sub>二</sub>旋二老間、多獲<sub>二</sub>其言論風旨。明年辞去、見<sub>二</sub>保寧全無用・金山奇退庵。退庵問曰、遠來何為。師曰、究<sub>二</sub>明己事。退庵曰、生死到來時如何。師曰、渠無<sub>二</sub>生死。退庵曰、參堂去。久之遊<sub>二</sub>四明、依<sub>二</sub>育王瑞秀巖。時<sub>二</sub>仏照禪師居<sub>二</sub>東庵、印空叟分<sub>レ</sub>座。(正統藏一一一・四八四a)

とあり、紹熙六年(慶元元年、一一九五)秋に無準師範が荊南(湖北省)の玉泉寺に到り、その翌年の慶元二年には玉泉寺を辞去して建康府(南京)の鳳台山保寧寺で無用淨全に參じ、さらに鎮江府(江蘇省)の金山龍游寺で退庵道奇に參じている。とりわけ師範が金山の道奇と「己事究明」「生死到來」の問答をなして參堂を許されたことが知られ興味深い。

(13) 妙峰之善と鄭清之との関わりは『枯崖和尚漫録』卷上「妙峰善禪師住<sub>二</sub>杭之靈隱」の項(正統藏一四八・七七d)や卷下「丞相鄭公清之」の項(同・九三a)にも載せられている。また『統伝燈録』卷三五「杭州靈隱妙峰善禪師」の章に、

分<sub>二</sub>三座於雁山能仁。出<sub>二</sub>三世於慧因・洪福・万年諸刹。退<sub>二</sub>居阜亭劉寺<sub>一</sub>者又十餘年、大略如下<sub>二</sub>妙峰<sub>一</sub>時。其徒推迫<sub>レ</sub>不已、後領<sub>二</sub>三明

之瑞岩・蘇之万寿・常之華藏。晚至<sub>二</sub>靈隱<sub>一</sub>、亦非<sub>レ</sub>所樂。靈隱密<sub>二</sub>廻行闕<sub>一</sub>、輪蹄湊集。師掩<sub>レ</sub>戸若<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>聞、一無<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>將迎<sub>一</sub>。公卿貴人或見<sub>レ</sub>之寒温而已。会天童虚<sub>レ</sub>席。時鄭清之秉<sub>レ</sub>鈞軸、独念、非<sub>レ</sub>師莫<sub>レ</sub>宜<sub>レ</sub>居。因勉<sub>レ</sub>師行。師答曰、老僧年踰耄矣、尚夜行不<sub>レ</sub>休乎。辞弗<sub>レ</sub>就。鄭公益高<sub>レ</sub>之。(中略)將<sub>レ</sub>示寂、澡<sub>レ</sub>身趺坐。書<sub>レ</sub>偈云、来也如是、去也如是、来去一如、清風万里。遂逝。実端平二年九月二十八日。寿八十四、臘七十一。火浴獲<sub>二</sub>舍利<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>数計<sub>一</sub>。塔<sub>二</sub>于靈隱之西岡<sub>一</sub>、鄭公銘<sub>二</sub>其塔<sub>一</sub>。(大正藏五一・七〇六c)と記されているから、靈隱寺の西岡に立てられた之善の墓塔には鄭清之が撰述した塔銘(表題は「靈隱妙峰禪師塔銘」か)が立石されたものらしい。

(14) 『増集続伝燈録』卷一「杭州靈隱妙峰之善禪師」の章にも、

会天童虚<sub>レ</sub>席。時鄭清之秉<sub>レ</sub>鈞軸、謂、非<sub>レ</sub>師莫<sub>レ</sub>宜<sub>レ</sub>居。因勉<sub>レ</sub>師行。師答曰、老僧年踰耄矣。尚夜行不<sub>レ</sub>休乎。鄭公高<sub>レ</sub>之。(正統藏一四二・三七四b)

という記事が載せられている。宰相の鄭清之が靈隱寺の妙峰之善に對して虚席となっていた天童山景德寺に入寺を打診したが、之善は高齡を理由に辞退し、靈隱寺に留まっていたとされる。状況からしてこれは之善がかなり晩年に至った頃のできごとであろう。

(15) 無門慧閑と鄭清之の関わりについては、佐藤秀孝「無門慧閑の生涯と『無門関』(二)——黄龍山崇恩禪寺から靈洞山護国仁王禪寺へ——」(駒澤大学仏教学部論集)第四九号、平成三〇年一〇月)の「西湖

北山に閑居して『無門関』を重刊する」の項に詳しい。

(16) 明州の梨洲寺に住持した禪者としては『物初和尚語録』「自贊」に「梨洲戒長老請<sub>レ</sub>贊」(正統藏一一一・九八c)が存し、大慧派の物初大観(一一〇一—一二六八)の法嗣に梨洲寺に住持した□戒という禪者が知られる。元代にも『菴和尚語録』卷五「自贊」に「梨洲興長老請<sub>レ</sub>贊」(正統藏一一三・三五三b)が存しており、「了堂和尚語録」卷二「了堂和尚讚語」にも「靈巖了庵和尚、其嗣法弟子梨洲興長老、參<sub>二</sub>待山行<sub>一</sub>像」(正統藏一一三・四六五a)が存するから、松源派(金剛幢下)の了庵清欲(南堂、慈雲普濟禪師、一二八八—一三六三)の法嗣である可興が梨洲寺に住持したことが知られる。梨洲街道は現今も余姚市から南は四明山麓に接する街道として知られる。

(17) 荆叟如珏については『続伝燈録』卷三五「臨安府径山荆叟禪師」の章、「増集続伝燈録」卷二「杭州径山荆叟如珏禪師」の章、『補続高僧伝』卷一一「如珏伝」などに伝が存しているが、いずれもさわめて簡略なものである。『枯崖和尚漫録』卷下「隆首座号<sub>二</sub>南山叟<sub>一</sub>」の項に「南山与<sub>二</sub>無隱<sub>一</sub>・雙杉・荆叟、同侍<sub>二</sub>癡鈍<sub>一</sub>為<sub>二</sub>最久<sub>一</sub>」(正統藏一四八・八七d)とあり、同じく卷下「荆叟珏禪師」の項にも、

荆叟珏禪師、作<sub>二</sub>夏靈巖<sub>一</sub>。時癡鈍俾<sub>レ</sub>其看<sub>二</sub>狗子無<sub>レ</sub>仏性話<sub>一</sub>、言下領<sub>レ</sub>旨。因与<sub>二</sub>潜無隱<sub>一</sub>通吐。無隱曰、是則是、只是命根未<sub>二</sub>断<sub>一</sub>、更須<sub>二</sub>出去見<sub>レ</sub>人始得。且囑<sub>レ</sub>其謁<sub>二</sub>淳庵<sub>一</sub>。叟至<sub>二</sub>華藏<sub>一</sub>、半年無<sub>二</sub>所得<sub>一</sub>。一日忽聞<sub>二</sub>火板響<sub>一</sub>、凝滞积然。告<sub>二</sub>於淳庵<sub>一</sub>。庵即鳴<sub>レ</sub>鼓開室。叟趲入。

庵問、如何是仏。叟曰、梵花開滿路。問、如何是法。叟曰、私酒醉人多。問、如何是僧。叟曰、鉢盂口向天。庵曰、未在出去。

後叟在癡鈍室中、聞拳、如何是仏、震声答曰、爛冬瓜。且述偈曰、如何是仏爛冬瓜、咬著氷霜透齒牙、根蒂雖然無罅子、一年一度一開花。荆叟処衆時、得無隱・雙杉力尤多。(正統藏一四八・九〇c・d)

とあるから、如珪が癡鈍智類や淳庵善浄らに參學したこと、修行時代に無隱□潜や雙杉中元から多くの助力を得たことが知られる。

(18) 雙杉中元については『増集続伝燈録』卷三「蘇州虎丘雙杉元禪師」の章が存するが、伝記的な記載は見られない。幸いに『枯崖和尚漫録』卷中「雙杉元禪師」の項に、

雙杉元禪師、戒行嚴潔、住秀之天寧。小參拳(中略)薰石田特稱之。雙杉生於福州福清鄭氏。先有温羅庵、後有密庵、繼而遼僻・雙杉也。遼僻即其俗門叔父、法門落髮師、清如源者、見趣操行尤卓然。鄭氏所出尊宿、可謂盛哉。(正統藏一四八・八二a・b)

とあり、雙杉中元の簡略な事跡が知られる。また遼僻とは中元の師匠である萬庵致柔と同門に当たる禪者であったらしいが、法諱が定かでない。中元は福州(福建省)福清県の鄭氏の出身であり、遼僻は中元にとって俗門(血縁)の叔父であった。さらに羅庵慧温や密庵咸傑らも鄭氏の一族とされる。同じく巻下「雙杉元禪師」の項にも、雙杉元禪師、嘉熙間乃石田堂第一座。上承相書言、朝廷新指揮、

高原祖泉と嘯巖文蔚——「如淨和尚語録」の跋文・校訂と越州天衣寺——(佐藤)

買師号金環象簡不便。書云、正月十三日、景德靈隱禪寺前堂首座、前住嘉興天寧寺僧中元、謹熏沐、獻書樞使大丞相國公、竊以為仏老之教救世計也。(中略)時江西蔡無文、亦有書。先是朝省因總領岳珂奏、乞降紫衣師号二等、賜金環象簡并四字禪師法号、以住大寺觀、每賜服師号、綾紙出壳三百緡、仍附品官条制、非有宣不得差注、非有賜服不得住持。此書上、事果寢、豈非秘護大法者之留情乎。雙杉住山、能極枯淡、專一行道、如機簡堂、私居雖處暗室、如臨大賓、似証老衲。此亦哲人律己、又見於微細者也、賢矣哉。(正統藏一四八・九一b・九二a)

という長文が載せられており、簡堂行機や老衲祖証を例に中元の清廉潔白な身の処し方が示されている。このほかにも『枯崖和尚漫録』には随所に雙杉中元に関する記事が載せられている。

(19) 『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』卷上「住院」に「即庵」の作として「高原瑞世梨洲」(日仏全八八・一三四c)の偈頌が載せられている。貞和類聚祖苑聯芳集』卷四「住院」にも「即菴」の作として「高原

(20) 『仏海瞎堂禪師広録』卷二「特賜仏海禪師住靈隱奏対語録」に、上問曰、頻呼小玉元無事、只要檀郎認得声。此是圓悟所得処、只是要人認得声。奏云、頻呼小玉元無事、不令小玉掃地煎茶。只要檀郎認得声、圓悟以此問五祖演和尚。五祖云、便是説禪。圓悟云、如何是禪。五祖再拳云、頻呼小玉元無事、

只要<sub>三</sub>檀郎認<sub>二</sub>得声<sub>一</sub>。如何是仏、麻三斤。圓悟忽有<sub>レ</sub>省。(正統藏一  
二〇・四六七a~b)

とあり、楊岐派の瞎堂慧遠と皇帝の孝宗が「頻呼小玉」に因んで、五祖法演と圓悟克勤の問答を取り上げている。

(21) 『北磻文集』巻五「序」の「送<sub>二</sub>上人持<sub>レ</sub>五序<sub>一</sub>」にも、

平地登雲、南北一舍強半、梨洲瞰<sub>二</sub>杖錫<sub>一</sub>、為<sub>二</sub>平野<sub>一</sub>。遠如之峻、陟則倍蓰。在昔單丁、今有<sub>レ</sub>衆。一踵<sub>レ</sub>門而言曰、育王太白衲子、古洙泗。比以万錢汰<sub>二</sub>旧学<sub>一</sub>、万錢何從得哉。梨洲門不<sub>レ</sub>暇<sub>レ</sub>敷、有<sub>レ</sub>來轍容。我則持<sub>レ</sub>盞出<sub>レ</sub>山。高原使<sub>二</sub>來相勞苦<sub>一</sub>。余聞而笑曰、梨洲失<sub>レ</sub>之矣。歳一荐饑、妄一夫拋<sub>二</sub>把茆<sub>一</sub>、足以傲<sub>二</sub>睨高蹈<sub>一</sub>、以振<sub>二</sub>其賈<sub>一</sub>。

鼎望且学<sub>二</sub>其為<sub>一</sub>、梨洲胡不<sub>二</sub>為<sub>レ</sub>与<sub>一</sub>。雖<sub>レ</sub>然我知<sub>レ</sub>之矣。智海云、僧者仏祖所<sub>二</sub>自出<sub>一</sub>、拒<sub>レ</sub>僧拒<sub>二</sub>仏祖<sub>一</sub>也。芙蓉則曰、可<sub>レ</sub>粥則粥、可<sub>レ</sub>飯則飯。若去与留、在<sub>レ</sub>彼而不<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>此。高原之心、有是夫。一曰、然。然則不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>以不<sub>レ</sub>書<sub>一</sub>、以振<sub>二</sub>梨洲学古之志<sub>一</sub>云。

とあり、一上人が誰なのかは定かでないが、梨洲寺における祖泉の活動の一端を伝えている。

(22) 『石田和尚語録』の冒頭に淳祐七年(一二四七)結制日に石溪心月が書いた序文が存するが、その中で心月はつぎのように述べている。

高峯小寺、石田最初說法所也。有二<sub>レ</sub>單丁<sub>一</sub>昼<sub>レ</sub>乞<sub>レ</sub>村落之風。開爐曰、欲<sub>レ</sub>聚<sub>二</sub>泥人<sub>一</sub>聽<sub>レ</sub>法、泥人亦不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>得。時高原・無准・即菴・中岳照与<sub>レ</sub>余偕至。(中略)未<sub>レ</sub>久遷<sub>二</sub>楓林<sub>一</sub>、拈古有<sub>レ</sub>黄龍易<sub>レ</sub>看<sub>二</sub>頭面<sub>一</sub>、難<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>心肝<sub>一</sub>等語上。雲巢称<sub>レ</sub>之、痴絶笔<sub>レ</sub>之。澗翁亦曰、老僧只

得<sub>レ</sub>避<sub>レ</sub>路。(正統藏二二一・一a)

このとき心月も高原祖泉・無准師範・即庵慈覚・中巖照など他の蜀僧らとともに高峯禪院に到つて法薫を助化していることが知られる。高峯禪院に関しては南宋後期に朱長文が纂修した『呉郡図経統記』巻中「寺院」に、

高峯禪院、在<sub>二</sub>胥山<sub>一</sub>、故在<sub>二</sub>洞庭<sub>一</sub>。近歳郡人張諮葬<sub>二</sub>親于胥山下<sub>一</sub>、旁建<sub>二</sub>精舍<sub>一</sub>、乃請移賜<sub>二</sub>額于此<sub>一</sub>。諮弟曰詢、今為<sub>二</sub>戸部員外郎<sub>一</sub>。

とあり、簡略な建立の状況が知られる。開基檀越は郡人の張諮であり、親を胥山の下に葬つて旁に伽藍を建てて額を高峯禪院と賜っていることが知られる。

(23) 『石田和尚語録』巻一「石田和尚初住平江府高峯禪院語録」(正統藏二二一・一c~d)には嘉定七年閏九月二二日の入院法語として「指<sub>三</sub>門<sub>一</sub>」「仏殿」「踞<sub>二</sub>方丈<sub>一</sub>」「拈<sub>レ</sub>帖」「入院上堂」を載せた後、わずかに「上堂」「散<sub>二</sub>聖節<sub>一</sub>上堂」「冬節上堂」を記すのみであり、一〇月一日になされた「開爐上堂」は収められていない。

(24) 中巖については参学や嗣承などが定かでないが、『枯崖和尚漫録』巻中に「中巖寂禪師」(正統藏一四八・八三c)として載る禪者がこれに当たろうか。あるいは中岳照と解して全く知られていない別の禪者であったかも知れない。

(25) 『重修紹興府志』巻三「地理志三(山)」の「山陰界」には、法華山。(一統志)在<sub>二</sub>山陰縣西南二十五里<sub>一</sub>。十峯聳峙、下有<sub>二</sub>双澗<sub>一</sub>。(嘉泰志)去<sub>レ</sub>県西南二十五里。旧經云、晋義熙十三年、僧曇翼、

誦「法華經」、感「普賢心現」、因置「寺」。今爲「天衣禪院」。山有「十峯」、咸平中、裴使君莊、各命以名、一「法華」、二「衣鉢」、三「積翠」、四「朝陽」、五「雲門」、六「倚奏」、七「天女」、八「嘯猿」、九「起雲」、十「月嶺」。其下「二溪」、東北流、冬夏不竭。唐李邕「天衣寺碑」云、其峯五連、其溪双帶。蓋謂此也。(後略)

とあり、同じく『重修紹興府志』卷三八「祠祀志三(寺上)」の「山陰県」には、「嘉泰會稽志」の天衣寺の記事を載せた後、

天衣寺。(嘉泰志)(中略)(万歴志)寺有二化身普賢及飛來銅像。化身普賢、即曇翼所立。飛來銅像、乃海南維衛無量壽佛像云、是西域阿育王第四女、以姿貌寢陋、冀其端嚴、捨金銅冶鑄斯像四十九軀、首飾火焰、足飾蓮花、布散天下、爲衆生植福之本。浮海而至、梁武以施山中、奉于西序。寺多杜鵑花、每歲盛開、觀者競集。寺後有十峰堂、堂之前有唐李邕撰碑、斷石尚存。元末寺燬于火、佛像碑悉煨燼。明洪武中、再建寺。嘉靖初、僧亦稍修之、田產尚盛。三十五年、召佃爲民業、寺遂廢。と伝えている。天衣寺は元末に火災で焼失し、明の洪武年間(一三六八—一三九八)に一旦は再建されているが、嘉靖三十五年(一五五六)に廢寺となつたとされる。

(26) 雲門宗の天衣義懷が天衣寺に住持したことは著名であるが、そのほかに天衣寺に住持した禪者としては北宋末期に天衣惠通・天衣昭愛らがあり、南宋初期に天衣如哲・天衣智暹・天衣□性・天衣法聰らがいる。南宋中期に高原祖泉・嘯巖文蔚らが住持し、元代にも断

江覺恩・業海了清・天鏡原瀨らが住持している。また元代に『禪宗頌古聯珠通集』を続集した魯庵普会も天衣寺の住持であった。

(27) 『続伝燈録』卷三四「目錄」や『増集続伝燈録』卷一「目錄」では単に「盤山思卓和尚」としてしか名が存しないが、円爾が將來した東福寺所蔵「宗派図」に「無用全禪師」の法嗣の一人として「瑞岩卓禪師」とある。また瑞長本「建誓記」によれば、

台州小翠岩ニシテ卓老和尚ニ參見ス。道元乃問、如何是仏。老答云、殿裏底。元云、既是殿裏底、爲甚周遍恒沙界。卓云、遍沙界。(吉田本・九四頁)

とあり、道元は台州小翠巖で思卓(卓老)と相見し、仏の法身について問答を交している。

(28) 殺六巖とは、五祖法演―南堂元静―石頭自回―蓬庵徳会―壞衲大璉―六巖□殺と嗣承する楊岐派の禪者であり、日本の南北朝後期に刊行された『仏祖正伝宗派図』には「萬杉壞衲大璉」の法嗣に「天王六嶺□殺」としてその名が見られる。ただし、『禪宗頌古聯珠通集』にこの人の頌古が数則収められているが、いずれも「殺六巖□輝」の作とされているから、あるいは殺六巖とはこの人の雅号の一種で、実際には□輝という法諱であったのかも知れない。この人は蘇州呉県の穹窿山福臻禪院のほかに蘇州呉県の洞庭山の天王寺や衢州(浙江省)の祥符寺に住持している。

(29) 『癡絶和尚語録』卷末「徑山癡絶禪師行狀」に「宝慶乙酉、被堂帖移蔣山。(中略)十四年、始終如一日」(正統藏二二・二二八

(二c)とあるから、癡絶道冲が蔭山に住持したのは宝慶元年(一二二五)であったことが知られる。ときあたかも祖泉が台州瑞巖寺に住持した翌年のことであり、両者の記事が符合していることが確かめられる。

(30) 台州瑞巖寺の無量宗寿のもとで首座を務めた無門慧開に関しては、佐藤秀孝「無門慧開の生涯と『無門関』(一)——杭州天龍寺から月林師親のもとへ」(『駒澤大学仏教学部論集』第四八号、平成二九年(二〇一七)一〇月)の「台州瑞巖寺の無量宗寿のもとで『無門関』を提唱する」の項を参照。

(31) 伊藤秀憲氏は『仏鑑禪師語録』の上堂年時考—宝慶三年如淨示寂説を確かめる—(駒澤大学中国仏教史蹟参観団編『中国仏蹟見聞記』第七集、昭和六一年(一九八六)八月)において、

第一五九に靈隱高和尚計音至上堂があることから、靈隱寺の住持であった高原祖泉が紹定二年に示寂していることがわかる。彼は前年の紹定元年一〇月一日に『如淨語録』に跋文を著わしていると論じており、祖泉が示寂したのを紹定二年(一二二九)であると確定している。

(32) 四明(明州)の曇秀が編集した『人天寶鑑』巻末には、秀書記、集<sub>レ</sub>古成<sub>レ</sub>書、曰<sub>二</sub>人天寶鑑<sub>一</sub>、請<sub>二</sub>著語<sub>一</sub>。遂<sub>下</sub>二一<sub>一</sub>転<sub>二</sub>云、先德情知已厚顔、那堪<sub>二</sub>落<sub>レ</sub>井更攀<sub>レ</sub>欄、本来一点明如<sub>レ</sub>日、胡漢何曾自照看。紹定庚寅中秋、住<sub>二</sub>靈隱<sub>一</sub>妙堪書。

(正統蔵一四八・七一d)

とあり、紹定三年(一二三〇)八月一日(中秋)に笑翁妙堪は靈隱寺の住持として『人天寶鑑』に跋文を寄せている。八月の時点ですでに妙堪が靈隱寺の住持を務めていたことが判明する。

(33) 瑞長本『建撕記』のみに明州大慈寺と如淨をめぐる伝承として、太宋宝慶三年七月十七日示寂。丞相魯公ト申ス人、以<sub>二</sub>書札<sub>一</sub>奉<sub>レ</sub>招リ、大慈寺ヲ開キ、此寺之開山祖師ト奉<sub>レ</sub>仰ヘキ由シ申サセ給イケレハ、其ノ返事ニ云、老僧不<sub>レ</sub>數日、行脚スヘシト云テ、其儘俄ニ違例サセ給テ円寂シ給。(吉田本・一四二頁)

という興味深い逸話を伝えている。如淨が示寂する直前に丞相魯公すなわち宰相の史彌遠から明州鄞県に新設する大慈山教忠報国禪寺(明州大慈寺)に開山始祖として拝請したい旨の書札が届いたが、如淨は数日ならず遷化するのでその申し出は辞退すると返書し、そのまま宝慶三年(一二二七)七月一日に遷化したされる。その後、実際に明州大慈寺(史家の家利で甲利位)の開山となったのは大慧派の笑翁妙堪であり、妙堪は杭州靈隱寺の住持を務めた後に明州大慈寺に赴き、正式に開山として入院開堂を果たしている。こうした状況を踏まえると、如淨と史彌遠との関わりも十分あり得たものと見られ、後に入宋渡航した道元門下の寒巖義尹(法王長老、一一二七—一三〇〇)は明州大慈寺を訪れてその景観を愛し、帰国して肥後(熊本県)に大梁山大慈寺を創建している。

(34) 『明州阿育王山志』卷三「塔廟規製」に載る嘉定七年(一二二四)八月望に秘書省校書郎の薛叶(凌雲)が撰した「育王上塔碑記」に、



嘉定二年春、溫陵沙門大明、一再登臨、環視塔院、方惠其局、促不足<sub>レ</sub>以表先<sub>レ</sub>遺跡。忽覩壁間文一、嘆曰、此記似<sub>レ</sub>為我設、當<sub>レ</sub>与振起<sub>レ</sub>之。是年夏五月、塔崩<sub>二</sub>一角<sub>一</sub>。明年八月、大風擊<sub>レ</sub>屋、木拔者万計、塔頂鈴索擺掣俱斷。又明年八月二日、風雨益怒、塔益狼狽、堂宇殿軒周廻悉以頽、枕藉無<sub>レ</sub>有遺餘。遂募<sub>二</sub>衆緣<sub>一</sub>、革去<sub>二</sub>心柱<sub>一</sub>、更鑄<sub>二</sub>相輪<sub>一</sub>、重飾<sub>二</sub>珠層級<sub>一</sub>、數敗悉從整治。開<sub>二</sub>拓基趾<sub>一</sub>、增<sub>二</sub>築垣墻<sub>一</sub>、為<sub>二</sub>屋几一百五十楹<sub>一</sub>、皆更造焉。塔殿前後塑為<sub>二</sub>十八心真・補陀大士宝相門檻莊嚴之具<sub>一</sub>、靡<sub>レ</sub>不畢備崇奉之礼。於是為<sub>レ</sub>称、費<sub>二</sub>緡錢一万<sub>一</sub>。落成之日、山中蒼旧雲衲、遊觀瞻仰贊歎、不<sub>レ</sub>復有<sub>二</sub>前人之遺恨<sub>一</sub>矣。明持住山如庵惠崇書<sub>一</sub>來求<sub>レ</sub>記。とあり、このとき阿育王山の現住であつた如庵惠崇の名が存しているから、その後に惠崇は示寂していることにならう。

(35) 佐藤秀孝「笑庵了悟と晦巖大光―道元が在宋中に参学した阿育王山の大光長老をめぐって―」(駒澤大学仏教学部研究紀要)第七三号、平成二七年(二〇一五)三月を参照

(36) 惠因講寺(俗称は高麗寺)に關しては、大慧派の笑隱大新(蒲室、広智全悟大禪師、一二八四―一三四四)の『蒲室集』卷一「疏」に「高麗惠因寺化脩造疏」が存し、『蒲室集』卷九「記」にも「開府儀同三司榮祿大夫平章政事集賢院使領會同館事吳国公、杭州高麗惠因教寺歲閱藏經記」が存している。

(37) 『統燈存彙』卷二「杭州靈隱高原祖泉禪師」の章では、  
拳、鏡清在<sub>二</sub>雪峯<sub>一</sub>一日普請次、峯曰、瀉山道、見<sub>レ</sub>色便見<sub>レ</sub>心、還

有<sub>レ</sub>過也無。清曰、古人為<sub>二</sub>什麼事<sub>一</sub>。峯曰、雖然如<sub>レ</sub>是、我要<sub>二</sub>共<sub>レ</sub>你商量。清曰、若<sub>レ</sub>与麼、不<sub>レ</sub>如<sub>二</sub>某甲鑿<sub>レ</sub>地去<sub>一</sub>。師拈曰、雪峯探<sub>レ</sub>竿在<sub>レ</sub>手、影舛隨身。若不<sub>レ</sub>是鏡清普請、幾乎狼藉。(『統藏』一四五・二九d(三〇a))  
とあり、この偈頌を詠じた靈隱泉禪師を明確に靈隱寺の祖泉のことと解して掲載している。

(38) 『攻媿集』卷一〇「塔銘」の「頑空法師塔銘」に、  
師名智覺、号<sub>二</sub>頑空<sub>一</sub>。東嘉頃氏、簪纓之族。蚤慧就<sub>二</sub>家塾<sub>一</sub>、進倍<sub>二</sub>群稚<sub>一</sub>。十三捨<sub>レ</sub>家、礼<sub>二</sub>郡之越興寺徒定<sub>一</sub>。得度。甫具戒、即白<sub>レ</sub>定曰、誓学<sub>二</sub>台乘<sub>一</sub>。徧依<sub>二</sub>諸老<sub>一</sub>。隙地靜几、金玉寸陰、決志大猷、不<sub>レ</sub>弄<sub>二</sub>筆墨<sub>一</sub>。涼霄雨夕、燈影明滅、同儕或冥搜。師方朗誦<sub>二</sub>祖誥<sub>一</sub>曰、吾以<sub>レ</sub>此代<sub>二</sub>声律<sub>一</sub>。忽感而曰、鄉先哲<sub>レ</sub>智<sub>レ</sub>法智<sub>レ</sub>適也。在<sub>レ</sub>則人、亡<sub>レ</sub>則書、敢不<sub>レ</sub>勉<sub>レ</sub>諸。歸取<sub>二</sub>智遺書<sub>一</sub>、沈潛反覆、悉然解會。回<sub>レ</sub>視群言、如<sub>レ</sub>破<sub>レ</sub>竹矣。往見<sub>二</sub>嘯巖於東掖山<sub>一</sub>。巖已默識<sub>レ</sub>之、從容誦詰。尺圍<sub>二</sub>鑰合<sub>一</sub>、即俾<sub>二</sub>冠冕多士<sub>一</sub>。久之徇<sub>二</sub>徃<sub>一</sub>。栢庭・古雲<sub>二</sub>主翁<sub>一</sub>、礼敬優異、先後命分<sub>二</sub>其席<sub>一</sub>。庭羅致尤勩、形<sub>二</sub>諸偈語<sub>一</sub>。紹定己丑春、有<sub>レ</sub>旨以<sub>レ</sub>禪<sub>二</sub>禳事<sub>一</sub>、宣<sub>二</sub>上竺王僧<sub>一</sub>、赴<sub>二</sub>南水門<sub>一</sub>引見。庭方在<sub>レ</sub>假、師居<sub>二</sub>三座<sub>一</sub>。得<sub>レ</sub>旨代<sub>レ</sub>入、峻事王音褒嘉、賜資甚渥。庭目疾久、擬告老表師自代、牢讓乃已。俄出<sub>二</sub>世明之超果<sub>一</sub>。  
とあり、智覺が台州(浙江省)の東掖山で嘯巖文虎のもとに投じたこと、さらに同じ天台宗の樞庭善月や古雲元粹らに参学したことを伝えている。

(39) 大川普済の『大川和尚語録』「贊仏祖」に「円覚頑空竟講主真贊」が存し、その中に「是為三広智九世之孫、嘯巖一枝、不致三寥寞一者矣」(『正統藏』二二・一七〇b)とある。

(40) 松源崇嶽の『松源和尚語録』巻下「偈頌」に、

示如浄禅人。

劈面三拳、連頭兩堂。撒手懸崖、喪尺伎倆。德雲不<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>別峰上<sub>一</sub>。

(『正統藏』二二・三三四c)

とあり、門下に到った如浄に対して示した偈頌を残している。また逆に如浄も『如浄和尚語録』「偈頌」に、

拄杖頌寄<sub>二</sub>松源和尚<sub>一</sub>。

七尺烏藤掛<sub>二</sub>東壁<sub>一</sub>、春風忽<sub>レ</sub>來生<sub>二</sub>兩翼<sub>一</sub>。鞭<sub>レ</sub>起飛龍、趁<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>得、洞庭攪碎琉璃碧。去兮去兮明<sub>レ</sub>歷歷、梅花影裡休<sub>二</sub>相覓<sub>一</sub>。為<sub>レ</sub>雨為<sub>レ</sub>雲自

古今、古今寥寥有<sub>二</sub>何極<sub>一</sub>。(『大正藏』四八・一三三b)

という偈頌を残し、「拄杖頌」を詠じて崇嶽に呈している。

(41) 『仏鑑禪師語録』巻五「序跋」(『正統藏』二二・四七九d～四八〇a)

には「跋<sub>二</sub>嘯巖語録<sub>一</sub>」のほかにも「跋<sub>二</sub>雲窠語録<sub>一</sub>」「跋<sub>二</sub>念鉄髻語録<sub>一</sub>」

「跋<sub>二</sub>少林語録<sub>一</sub>」「跋<sub>二</sub>石巖語録<sub>一</sub>」「跋<sub>二</sub>石田語録<sub>一</sub>」「跋<sub>二</sub>大歇語録<sub>一</sub>」

が存しており、無準師範が松源下の雲巢道巖・石巖希璉・大歇仲謙

の語録、大慧派の少林妙崧の語録、同門の石田法薫の語録、それに

嗣承未詳の鉄髻□念の語録にそれぞれ跋文を寄せていることが知ら

れる。この中で語録が現存する『石田和尚語録』巻四の末尾には、

吾父翁活業、為<sub>二</sub>石田兄<sub>一</sub>、破蕩無<sub>レ</sub>遺。今觀<sub>二</sub>前項所<sub>レ</sub>供、並是詣美、

至<sub>二</sub>切要處<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>覺咬<sub>二</sub>斷拊指<sub>一</sub>。

徑山弟師範、拜首。(『正統藏』二二・四〇b)

という跋文が実際に収められている。師範は径山の住持として法兄法薫の『石田和尚語録』に跋文を寄せていることから、文蔚の語録や各禅者の語録の末尾にも同様に跋文を寄せていたはずであろう。

(42) 『施食偈文』は訓ずると「三徳六味もて仏及び僧に施す。法界の有情、普く供養を同じくす」となる。『禪苑清規』巻一「赴粥飯」に、

粥云、粥有<sub>二</sub>十利<sub>一</sub>、饑<sub>レ</sub>益行人、果報生<sub>レ</sub>天、究竟常樂。又云、粥

是大良藥、能除<sub>二</sub>消飢渴<sub>一</sub>、施受獲<sub>二</sub>清涼<sub>一</sub>、共成<sub>二</sub>無上道<sub>一</sub>。齋云、三

徳六味、施<sub>二</sub>仏及僧<sub>一</sub>、法界人天(有情)、普同<sub>二</sub>供養<sub>一</sub>。(『正統藏』一

一・四四一b)

とあり、齋時(中食)のときに唱える「施食偈文」とされている。

三徳とは輕軟・淨潔・如法のこと、六味とは甘・辛・苦・鹹・酸・

淡という六つの味覚をいう。『白雲端和尚広録』巻二「舒州白雲山海

会禅院語録」に、

上堂。拳、雲門道、終日喫<sub>レ</sub>鉢、不<sub>レ</sub>曾咬<sub>二</sub>著一粒米<sub>一</sub>。為<sub>二</sub>什麼<sub>一</sub>終

日喫<sub>レ</sub>鉢、不<sub>レ</sub>曾咬<sub>二</sub>著一粒米<sub>一</sub>。若道<sub>二</sub>咬著<sub>一</sub>、即与<sub>二</sub>雲門<sub>一</sub>相違。不<sub>レ</sub>

唯与<sub>二</sub>雲門<sub>一</sub>相違、自己向<sub>二</sub>甚處<sub>一</sub>去也。若道<sub>二</sub>不<sub>レ</sub>曾咬著<sub>一</sub>、又作麼

生得<sub>二</sub>肚裏飽<sub>一</sub>。要<sub>レ</sub>會麼。三徳六味、施<sub>二</sub>仏及僧<sub>一</sub>、法界有情、普全<sub>二</sub>

供養。(『正統藏』二〇・二二三a)

とあり、楊岐派の白雲守端は「雲門不<sub>レ</sub>曾咬<sub>二</sub>著一粒米<sub>一</sub>」の古則を拳して上堂した際、この「施食偈文」を唱えている。

(43) 鏡島元隆氏は『天童如浄禪師の研究』(昭和五八年(一九八三)八月、春秋社刊)の「訳註『如浄語録』」において、

如浄禪師の語録は、『証道歌』にいわれる獅子ひとたび吼え、無畏の法を説けば、百獸はこれを聞いてみな脳天が破裂するというものである。いま、天衣はこの人(如浄禪師)こそ古を越え今を超え、通途の枠を超えた人であると挙揚する。(同著・一四六頁)

と嘯巖文蔚の序文を現代語訳している。文蔚は「獅子吼無畏の説」を踏まえて如浄の語録を評している。

(44) 『宗門聯燈会要』巻一五「潭州大滄慕詰禪師」の章に、

示<sub>レ</sub>業云、古仏道、昔於<sub>二</sub>波羅奈<sub>一</sub>・<sub>二</sub>四諦法輪<sub>一</sub>、墮<sub>レ</sub>坑落<sub>レ</sub>甕。今復<sub>レ</sub>軼<sub>二</sub>最妙無上大法輪<sub>一</sub>、土上更<sub>レ</sub>加<sub>レ</sub>泥。如今還有<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>歷<sub>二</sub>階梯<sub>一</sub>・<sub>二</sub>超三方外<sub>一</sub>者<sub>レ</sub>麼。良久云、出<sub>二</sub>頭天外<sub>一</sub>看、誰是箇中人。(『正統藏』一三六・三三七d)

とあり、臨濟宗の大滄慕詰(真如禪師)は「階梯を歷ず独り方外に超ゆる者」を「箇中の人」となしている。

(45) 『勸建浄慈寺志』巻一二「塔院二」の「少林塔」によれば、水庵塔は浄慈寺の蓮華洞口にあつて少林妙崧の少林塔に付属し、大慧派の肯堂彦充、嗣承未詳の節庵と水原、破庵派の断橋妙倫、大慧派の北磻居簡、破庵派の古田徳屋と方山文宝らと合祀されたと伝えられる。節庵は天台宗の節庵元敬のことであろうか。

(46) 鏡島元隆氏は『天童如浄禪師の研究』(昭和五八年八月、春秋社刊)の「訳註『如浄語録』」において、

如浄禪師は何びともよらない言葉をもって、すばらしいはたらきを示された。それは、無限の過去に遡り、無限の未来に及んで、本来無なる面目を提示したものである。それ故に、粗暴勇猛なものが、全身を眼にして、この語録を見ようとしても、わたしは保証する。そのものはこの如浄禪師の脚跟下の真面目をみることはできないにちがいない。(同著・一四五頁)

と祖泉の跋文を現代語訳している。ただし、『山本『如浄禪師語録』では後序として、面山本『天童浄禪師語録』では跋文として祖泉のことばが載せられている。

(47) 佐藤秀孝「少林妙崧と杭州の五山禪林―拙庵徳光・濟顛道済・長翁如浄・浙翁如琰・無準師範・玉澗光瑩らとの関わり―」(『駒澤大學仏教学部研究紀要』第七四号、平成二八年(二〇一六)三月)と同「少林妙崧と長翁如浄―浄慈寺と径山の住持職をめぐって―」(『曹洞宗総合研究センター』『學術大会紀要』第一七回、平成二八年(二〇一六)一〇月)を参照。

(48) 佐藤秀孝「枯禪自鏡とその門流―如浄が天童山の後事を託した臨濟禪者―」(『曹洞宗総合研究センター』『學術大会紀要』第一六回、平成二七年(二〇一五)一〇月)を参照。

(49) 『続刊古尊宿語要』第六集の『或菴体禪師語』の上堂に、  
少室無師句、曹溪絶学禪、渾家鬼擘<sub>レ</sub>口、五逆不<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>冤。何故。天<sub>レ</sub>之自高、地<sub>レ</sub>之自厚、人<sub>レ</sub>之自在、道<sub>レ</sub>之自然。(『正統藏』一九・九三a)とあり、『介石和尚語録』「婺州雲黄山宝林禪寺語録」にも、

上堂。靈龜未<sub>レ</sub>兆之際、黒豈未<sub>レ</sub>芽已前、道<sub>二</sub>得<sub>一</sub>一句。盖地盖天、猶未<sub>二</sub>是無師句自然句。秋風高、秋空闊、雪峰何曾桶底脫。(已統藏一一一・一九一a)

とある。無師句とは師匠から受け継いだものでなく、自身で究め尽くした境地から発せられた一句の意である。

(50) 妙心寺派の無著道忠は『禅林象器箋』巻五「第五類靈像門」に、密迹金剛。禅刹山門、亦有<sub>下</sub>安<sub>上</sub>金剛像者、所謂<sub>二</sub>王也。

聯燈會要、浄果守澄禪師章云、問、会昌沙汰時、護法善神向<sub>二</sub>甚處<sub>一</sub>去。師云、三門外兩箇、一場懺懺。

西巖恵和尚開善録云、元宵上堂。屋上山橋下水、三門八字打開。左右青葉・婁至、頭頂<sub>レ</sub>天脚踏<sub>レ</sub>地。

南堂欲禪師開福録云、山門頭樓至德如來、兩脚踏<sub>レ</sub>地。

明極俊禪師再住建長録、山門語云、山門八字開、金剛兩辺立。

忠曰、王是法意化身、名<sub>二</sub>密迹金剛<sub>一</sub>。下詳説。然禪録皆称<sub>二</sub>青葉・樓至<sub>一</sub>。此<sub>二</sub>仏現<sub>二</sub>力士形<sub>一</sub>、見<sub>二</sub>陸游所<sub>レ</sub>記。

陸務観入蜀記云、遊<sub>二</sub>聖報恩光孝禪寺<sub>一</sub>、二聖謂<sub>二</sub>青葉髻如來・婁至德如來<sub>一</sub>也。皆示<sub>二</sub>鬼神力士之形<sub>一</sub>、高二丈餘、陰威凜然可<sub>レ</sub>畏。

正殿中為<sub>二</sub>釈迦<sub>一</sub>、右為<sub>二</sub>青葉髻<sub>一</sub>号<sub>二</sub>大聖<sub>一</sub>、左為<sub>二</sub>婁至德<sub>一</sub>号<sub>二</sub>二聖<sub>一</sub>、三像皆南面。予按、藏経駒字函、娑羅浮殊童子成道、為<sub>二</sub>青葉髻如來<sub>一</sub>。青葉髻如來再出世、為<sub>二</sub>樓至如來<sub>一</sub>。則<sub>二</sub>如來、本一身耳。有<sub>レ</sub>

碑言。邑人一夕同夢。二神人言、我青葉髻婁至德如來也。有二巨木在<sub>レ</sub>江干、我所<sub>レ</sub>運者、俟<sub>二</sub>鄣行者來<sub>一</sub>、令<sub>二</sub>刻為<sub>二</sub>我像<sub>一</sub>。已而果有<sub>レ</sub>人、

自称<sub>二</sub>鄣行者<sub>一</sub>、又善<sub>二</sub>肖像<sub>一</sub>。邑人欣然請<sub>レ</sub>之像成。人皆謂、酷類<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>夢。然碑無<sub>二</sub>年月<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>何代<sub>一</sub>也。

とまとめており、山門の仁王像(金剛力士像)と青葉髻如來・婁至德如來について考証している。

(51) 如浄門下の無外義遠(?—一二六六)は景定五年(一二六四)一月に「永平元禪師語録序」を寄せて、

非<sub>二</sub>超宗異目・慥暴生瘳・峭壁乖崖・孤危嶮絶<sub>一</sub>、何足<sub>下</sub>以起<sub>上</sub>衲僧瞑眩之疾<sub>一</sub>、拔<sub>レ</sub>邪見枝蔓之根。在<sub>レ</sub>古不<sub>レ</sub>乏、居<sub>レ</sub>今為<sub>レ</sub>誰。太白老人浄禪師、奮然一出、独振<sub>二</sub>此風<sub>一</sub>。(曹全宗源下・四二a)

と記しており、『如浄和尚語録』の跋文にある祖泉の「慥暴生瘳」の語を意識していたことが知られる。

(52) 『臨濟慧照禪師語録』の末尾には「住<sub>二</sub>大名府興化<sub>一</sub>嗣法小師存獎校勘」(大正蔵四七・五〇六c)とあり、『雲門匡真禪師広録』巻下の末尾には「住<sub>二</sub>福州鼓山<sub>一</sub>円覚宗演校勘、在<sub>二</sub>福州鼓山<sub>一</sub>王溢刊」(大正蔵四七・五七六c)とある。また『汾陽無德禪師語録』巻下「汾陽無德禪師歌頌」の末尾にも、

禪師語録旧版在<sub>二</sub>汾州<sub>一</sub>、歳久多<sub>二</sub>脱落<sub>一</sub>、南方亦少<sub>二</sub>見者<sub>一</sub>。今勸<sub>二</sub>衆縁<sub>一</sub>重鏤<sub>レ</sub>版、以広流通。

建中靖国元年正月初五日、比丘守中題。

洪州開禪宗文字陳政、印行。

廬山円通崇勝禪院住持伝法比丘円璣、校勘。

(大正蔵四七・六二九b~c)

とあるから、唐末五代から北宋代にすでに禪籍の出版刊行に際して有縁の禪者による校勘が行なわれていたことが知られる。

(53) 『松源和尚語録』末尾に松源派の古林清茂の跋文として、

由<sub>レ</sub>是募<sub>レ</sub>縁重刊、以<sub>レ</sub>寿<sub>二</sub>後世<sub>一</sub>、開<sub>二</sub>學者之正見<sub>一</sub>、掃<sub>二</sub>邪說之肆行<sub>一</sub>、豈少補哉。岢泰定三年二月初五日、金陵鳳臺法孫比丘清茂、謹書。

(中統藏二二一・三二六b)

と記されているなど、募刻は募縁刊行する、広く浄財を募って印刷出版する意である。

(54) 高橋秀榮氏は『永平寺史料全書・禪籍編』第一巻の「如浄和尚語録断簡」の「解説」で、

本書は、その時期に届いた宋版の『如浄和尚語録』を底本にして、本文が書写された可能性が高いことは、高原祖泉の跋文が毛筆体の筆跡そのままの字体で忠実に臨書されていることから推定される。さらに注目すべきことは、尾丁の下部に「寂円」と判読で

きる朱印(たて三・二cm×よこ三・一cm)が押されていることである。印影が不鮮明のため、これまで、その解読の試みがなされてこなかったようであるが、印鑑の刻み文字である篆書を集大成した辞典で、ウ冠、あるいは穴部、さらには口部に該当する文字を一文字ずつ照合検索してみたところ、尾丁の印影にもっとも近似的な文字は「寂」であり、「円」であることが確かめられた。(九二四b-九二五a)

と記しており、尾丁の朱印文の落款が「寂円」であること、渡来僧寂円が浄書に深く関わっていたことを解明されている。

(55) 寂円の生涯については、佐藤秀孝「宝慶寺寂円禪師について」(『曹洞宗研究員研究生研究紀要』第一八号、昭和六一年(一九八六)一月)に詳しい。ただし、論文執筆当時は永平寺所蔵「如浄和尚語録断簡」に寂円の落款が存することなど考察の対象となっていない。

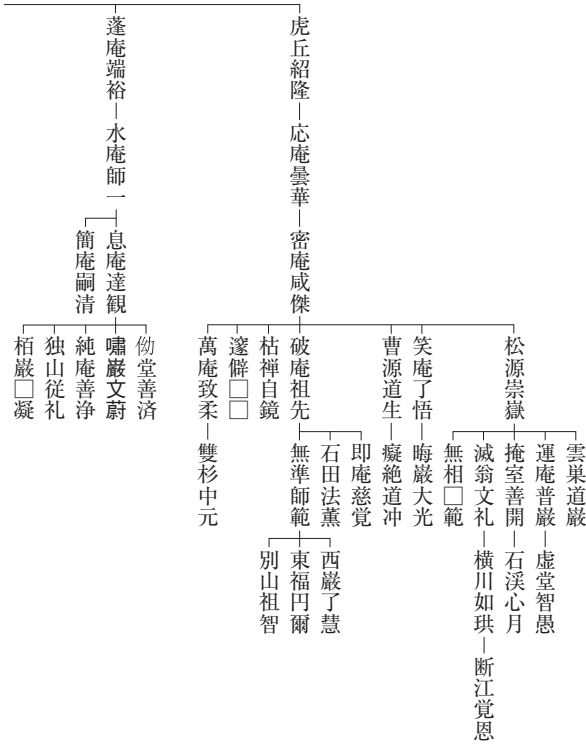
高原祖泉と嘯巖文蔚——『如浄和尚語録』の跋文・校訂と越州天衣寺——(佐藤)

【高原祖泉・嘯巖文蔚の関連系譜】

〔雲門宗〕

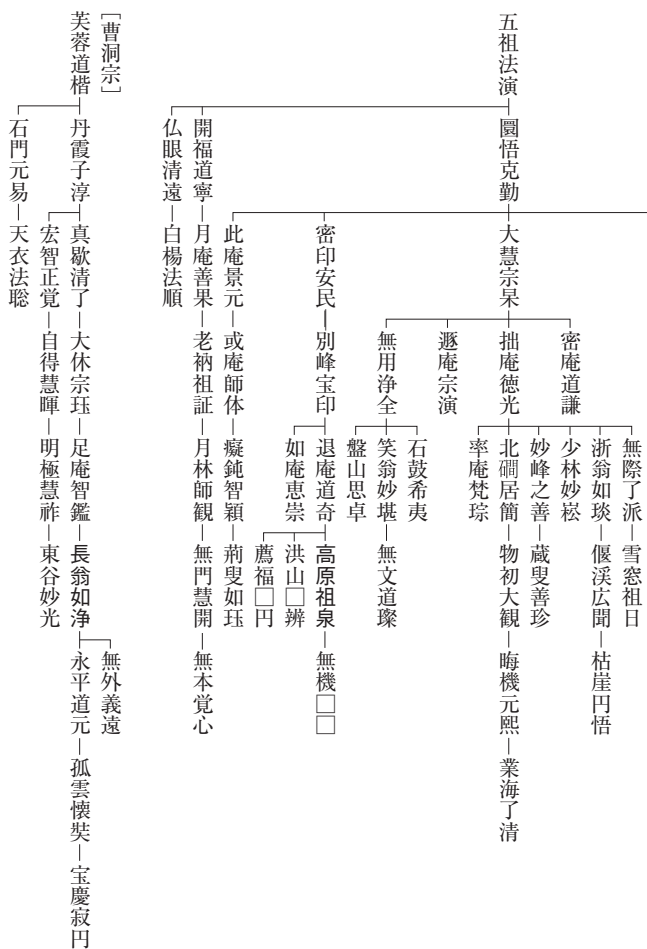
雪竇重顕—天衣義懷—円照宗本—大通善本—天衣恵通

〔長蘆崇信—天衣如哲〕



〔臨濟宗楊岐派〕





高原祖泉と嘯巖文蔚 — 『如浄和尚語録』の跋文・校訂と越州天衣寺 — (佐藤)

